

月刊

AMDA

国際協力

Journal

2

FEBRUARY

2001.2.1

(VOL.24 No.2)





ジブチ：オボック難民キャンプの子どもたち



ルワンダ：女性自立支援（マイクロクレジット）

AMDA 国際協力 Journal

2001
2月号

CONTENTS



ASMP
ベトナムでの
慰霊祭



AMDA Soul and Medicine Program (ASMP) 特集

カンボジア	2
インドネシア	4
フィリピン	6
ベトナム	8
ミャンマー	9
ホンジュラス報告	14
アフリカ報告	15
コンボ報告	16
アムダインターナショナル国際会議	18
AMDA 支部だより	22
寄付者一覧	23
事務局便り	24



表紙の写真

AMDA Soul and Medicine Program (ASMP) AMDA「魂と医療」プログラム (フィリピンでの慰霊祭)

2000年11月25日から31日にかけての7日間、AMDA「魂と医療」プログラム(ASMP)の一環として第1回合同慰霊祭がミャンマー、カンボジア、ベトナム、フィリピン、インドネシアで、日本と現地の宗教者によって実施されました。

このプログラムは第二次世界大戦で亡くなられたすべての人たちの魂の冥福をお祈りするとともに現地で生存されている関係者を中心とする地域住民の健康増進のためにAMDA多国籍医師団による健康・医療支援を行っていくことを目的としています。

AMDAの新しいプログラム(ASMP)への皆様のご理解とご支援をお願いいたします。

書き損じハガキを集めています

*書き損じのハガキ、未使用の切手・ハガキ、各種プリペイドカード等がありましたらAMDAにお送り下さい。

*使用済テレホンカードは収集しておりません。

【送り先】岡山市榑津310-1 AMDA事務局
お問い合わせは、TEL 086-284-7730
FAX 086-284-8959

ご協力お願いします

AMDA 会員ネットワーク 参加者募集

● <amda-jnet@amda.or.jp>

AMDA 会員とのインターフェイス機能を目的とし、AMDAの動きをリアルタイムでお知らせできます。

(AMDA 速報・イベント案内・人材募集)

ご希望の方は <member@amda.or.jp> まで、住所、氏名、電話、FAX に併せお申込み下さい。
AMDA 会員情報局

AMDA Soul and Medicine Program

AMDA「魂と医療」プログラム

合同慰霊祭への挨拶文

アムダ・インターナショナル
理事長 菅波 茂

※挨拶文は、日本からの宗教者の方々に託されました。

来賓の皆様をはじめとする今日の合同慰霊祭に参加して頂きました方々に厚くお礼を申し上げます。同時に、ミャンマー、カンボジア、ベトナム、フィリピン、インドネシアの5ヶ国で同時に実施されているこの合同慰霊祭開催に向けてご尽力いただきましたすべての方々に心から感謝申し上げます。

アムダ・インターナショナルは世界27ヶ国に支部を持つNGOです。私たちのキーワードは多民族、多宗教そして多文化を象徴する「多様性」です。そして私たちの目標は「多様性の共存」です。具体的には平和を妨げる要因としての戦争、災害そして貧困を解決するプロジェクトを通して「平和への世界的なパートナーシップ」を推進しています。

アムダ・インターナショナルは緊急人道援助および貧困対策などの多くのプロジェクトをアジアの各地でおこなっ

カンボジア

カンボジア手記

◇
禅定林澄禅寺住職 左藤 滋光 (滋賀県草津市)

皆さん、始めまして。私はASMPのプロジェクトで、このたびカンボジアの慰霊祭に参加したものです。本職は、宗教家兼人権活動家です。近江のジェシー・ジャクソン? を標榜して「人権問題とは、人の心の闇の表出である」をモットーに、今日もがんばっております。

このプロジェクトを縁に、カンボジアを経験させて頂きましたことは、人権活動家の私にとっては、本当に記念すべき節目となりました。感謝の気持ちを紙面をお借りして申し上げます。

私のカンボジア手記は、出発初日、11月25日から始まります。

なんと、関西国際空港で、バッテリーと中島師(私にAMDAの縁を伝えて下さった方)にお会いしてしまったのです。

実は、中島師がどこの国へ行くのか知りませんでした。ただ、カンボジアではない事だけは確かでした。なぜなら、私一人で出発する事になっていたのですから。

(何となく心細い…)

関空へ着いた私は、地下のコンビニへ慰霊祭用のローソクを買い求めに出かけ、その足で搭乗者口へ回ったのです。そこで荷を広げていたのが、中島師一行だったのです。(ここで会ったが百人力)と心はいつしか、前向き?へと転じていたのでした。

カンボジア慰霊祭は26日、プノンペンのウナロム寺院で行われました。

感激しました。と言いますのは、実は、この寺院の住職であるテップボン師と併設されている仏学院の院長、渋井さんと一同に会える事ができたからです。(出発前に打診しましたが、不発に終わっていました)それが何と、フタを開けてみたら、式典で一緒だったのです。驚きです。AMDAのスタッフも揃っての式典では、菅波代表のメッセ



ージを代読させて頂き、感無量でした。

さて、これからは私のカンボジアへの思いを語らせて頂きます。内戦についてです。ベトナム戦争で、アメリカはカンボジアまで侵略し、その影響で1975年の首都プノンペンには、人口200万人を数えるまでに膨れ上がりました。しかし、ポルポト派による郊外への強制移住により、3年後には無人と化したのです。それは、「学校・病院・貨幣のいらぬ理想郷建設」という狂気でした。

その結果はどうなったのでしょうか? 国土の人口三分の一の抹殺(200万人~250万人)で幕切れとなりました。その後国連が、かの地で平和社会建設作戦を実行しました。この教訓を受け継いだのが「人権教育のための国連10年」です。1994年に採択され、日本も受け入れ、現在行政は取り組んでいる最中です。すべての自治体は、この運動を展開しております。

このように、カンボジアは単なる慰霊祭の国ではなく、人類に警鐘を打ち鳴らす教訓の国として浮かび上がってくるのです。

カンボジアの内戦が形を変えて、人権教育の礎の一つになっている事を知る時、AMDAのプロジェクトによって、カンボジアで慰霊祭を実施した事は、単なる宗教行事に止まらないと思います。

「だれもが幸せに生きる権利」という人間の存在権まで遡及していく大切な活動と、このように私は受け止めているのです。

てきました。プロジェクトの現場でお会いした人々から第二次世界大戦の影響が各地に残っている事実を再確認しました。第二次世界大戦はまだ過去の歴史になっていないことを思い知らされました。少なくとも戦争の因果は三世代にわたり続き、戦争の事実は百年経たなければ過去にならないという現実です。現在はまだ55年目です。

アムダ・インターナショナルは日本の岡山に本部をおいています。私は第二次世界大戦においてアジア地域において多くの人々が亡くなられた事実を無視するわけにはいきません。なぜならこの戦争は私の両親の時代に引き起こされましたが、その被害者や家族の方々は今もこのアジアに生きていらっしゃいます。もちろん、AMDAの各支部のメンバーの中にもそのような方がたくさんいます。

私は第二次世界大戦によって亡くなられたすべての人々の魂の冥福をお祈りすると共に、現在生存されている関係

者の方々の健康増進のためにAMDA多国籍医師団の力を持って貢献しうるプロジェクトの実施を切望しています。

日本と現地の宗教者の方々のご協力により、この忌まわしき戦争により亡くなられた方々の魂のご冥福をお祈りすると共に、将来もこのような忌まわしい出来事により貴重な命が失われないように私自身も祈りつづける所存です。

私はこれをご縁といたしまして、第二次世界大戦でアジア地域にて亡くなられた人々の魂への冥福の祈りとご関係の皆様健康増進のために、「魂と医療のプログラム」を積極的に実施していくことを新たに決意したいと思います。

今後ともご関係の皆様方のご指導とご支援をよろしくお願い申し上げます。



AMDA「魂と医療」プログラム（ASMP）の一環として第1回合同慰霊祭がミャンマー、カンボジア、ベトナム、フィリピン、インドネシアで実施された。



合同慰霊祭 — AMDA「魂と医療」プロジェクト

2000年11月26日（日）

Hon. Samdech Tep Vong

King of the Monk of Cambodiaからのメッセージ

まず最初に、私はアムダ インターナショナルの派遣団の皆様及びこの式典を開催して下さったAMDAカンボジアのスタッフの皆様心から感謝申し上げます。外国、特に日本から私の寺院へ仏教の式典にご参加いただいた事を大変誇りに思っています。

第二次世界大戦は20世紀における人類史上実に悲惨な出来事でした。戦争は世界中の多くの国々で人々の生命を奪い、ほとんど全ての人間社会の組織を破壊しました。過去の経験から学んだ事、そして宗教を信じる事によって、結束、協力し、世界の国々とパートナーシップを結び、私達は二度と世界戦争が起こらないことを望んでいます。

本日、日本とカンボジアの次世代の人々が一緒になり、第二次世界大戦のためにカンボジアで犠牲になった人々の慰

霊祭に集まって下さった事を目の当たりにして、私は大変幸せに思っています。平和と開発のための世界的なパートナーシップを通して、世界が永遠に平和と協力のもとに生存出来る事を私は希望しています。

カンボジアの仏教協会を代表して、アムダ インターナショナルの菅波茂理事長に対しこの慰霊祭を企画して下さいました事、又日本仏教協会、特に京都仏教会にカンボジアの仏教機関及びその活動に理解と支援して下さいました事に対し、深く感謝申し上げます。

最後に、第二次世界大戦中に犠牲者となられた皆様のご冥福をお祈りすると共に直接又は間接的に被害を受けられた方々の今後の幸せを切望しています。

翻訳 藤井優文子

インドネシア

合同慰霊祭に参加して

天台宗泰養寺住職 寺田 光寂 (岡山県久米郡)

この度私が合同慰霊祭に参加するきっかけは、私の寺の檀徒の方が地域の福祉医療について理事長に相談にいかれて、そのとき私の事が話しに出てからです。

最初に話を聞いたときは半信半疑でしたが、理事長と直接話をして現実のものとなり了解は致しましたが私で役に立てるかは大いに疑問に思っていました、「私で役に立ちますか」の問い掛けに理事長が「大丈夫です」の一言で52歳の挑戦が始まりました。(出発前日の打ち合わせで、閑空に行くのは初めてだと言ったことには驚かれていたようですが)

11月25日、無事閑空を出発し機内で出入国カードを渡されたが、書き方がよく分からないので隣の女の子に教えてもらって記入。(後で持っていたガイドブックに記入法が書いてあることが分かる)

夕方、バリ島のデンパサール空港に到着、入国審査でカードの記入に何か不備を指摘しているようだが話を通じないのですぐ通してくれ、インドネシアの第一歩を踏み出すが、まだ誰が来てくれるのか解らないのでどうしたものかと思っているとすぐに、「寺田さんですか」と声をかけられる、「そうです」と返事をすると、岡山でタンラ先生が写した写真を見せてくれる。

この人がAMDAのインドネシア代表のタンラ先生が案内役として派遣して下さいましたマシュードさんです。(日本での就労経験もあり、よく日本語の解る方です)

その日は、バリ島のヒサダラヤホテルに宿泊するのですが、夕食は外に出て繁華街で頂きました。

翌朝、デンパサール空港に行き、空路ウジュンパンダンへ。空港には、タンラ先生が運転手として雇い学資の援助を受けて大学に行っているマクマオ君が迎えに来てくれました。

マクマオ君の運転により、ウジュンパンダンのタンラ先生の自宅に行き、先生の奥さんにお会いし、お茶をいただきました。

その後は、ウジュンパンダンから約80キロ離れたマリノのタンラ先生の別荘に先生に会いに向かう。マリノは標高約1000メートル、若者にも人気の避暑地だから、山道を登って行くと数え切れない程の単車に乗った若者と対向する。(かなり危ない運転が多い)

マリノの中心部を少し過ぎて先生のお気に入りの別荘に

着く、あいさつそこそこに、昼食をご馳走になる。

その後、別荘のまわりを散策、先生が前の棚田を指差し『私の一番の落ち着いた景色です』と教えて下さいましたが私にも非常に見慣れた風景でした。先生に私の家の近くにこの風景と非常に似通った所があるので写真を送りますと約束しました。

その後、マリノからウジュンパンダンに引き返し、当日の宿泊先である先生のゲストハウスと思われる別荘に落ち着く、ここでも先生の資金援助を受けながら別荘の管理をしているバンバン君がいました。(言葉は通じませんが非常に気を使ってくれました)

この日の夕食は、先生の馴染みのレストランでマシュードさん夫妻・マクマオ君と頂き、その後沢山の夜店の出ている海岸通りを案内してくれました。

次の日、空路目的地であるマナドーに行き、慰霊祭の行える場所をさがし、イスラム教の人たちとの慰霊について

はマシュードさんの親戚の方に仲介の労を取っていただきましたが、その時はイスラムの断食の時期に入っているとの理由から教会での慰霊祭は出来ないの、教会の近くの民家で行う事となりました。

次に仏教寺院での慰霊についてはマシュードさんの高校時代の友人の子の義理の父が紹介してくれました、その人も非常に熱心な仏教徒で、自分の寺院も建てているような方です。こ

の紹介して下さいましたスリヤダルマ寺は、マナドーから奥に約25キロ入った所にあり、学校を併設すると共に孤児院も兼ねて31人の子供たちも生活していました。このお寺で目的を説明し次の日の朝お祈りをさせて頂く了解ももらった後、そこから約20キロ程奥に入った旧日本軍の作った防空壕を見に行きました。

私自身は、戦争を全く知りませんが、そんな中で防空壕の中に入った気持ちはなんとも言い表せませんが、中の案内を全く言葉の解らない小さな女の子がしてくれた事がかえって私になんとも言えない安心感を与えてくれた気がしました。

この日、イスラムの教会での夜の祈りを終えた人々がすぐ近くの民家に集まり、今回の目的を集まった人たちに趣旨を説明しお互いに祈りの儀式を行った後『スラムマツバラム(今晚は)。私は、この地に来て、戦争の犠牲者すべ





ての魂の為に祈りを捧げることが出来た事に大変感謝しています。犠牲者の魂が私にこの地に来て新しい多くの友人を作らせてくれた事と、戦争により予期せぬ命を失った人々の事を思い起こす事が、より命の大切さを思い起こす機会となるからです。戦争という、個人の力ではどうすることも出来ない出来事により、尊い命を落とす事となった人々の魂を慰める為には、今生きている私たちが何をすれば良いのかを改めて認識しなければなりません。なぜ争いは起きるのか、すべての争いは相手を認めない事により起ります。

「今ここに人類すべての宗教の願いである平和な世界作りの為に今後とも祈ることを、新に誓います」とお礼をこめて、あいさつさせていただきました。

仏教寺院での慰霊祭は、今回の最終日の朝行いました。

お寺に到着すると、朝のお祈りがすぐ始まり、私も参加させていただきますと、皆さんが持っている教本を手渡され、見ると漢文の上にインドネシア語でルビを打ってあり、大部分が私たちが唱えているお経と同じであることに少し驚きました。

教本を見ているとすぐに子供達が今唱えている所を指差し教えてくれました。

読み方の内三分の二近くは同じ読み方のものであったのは何となく嬉しかったです。

それが終わり、場所を変えて最初にイスラム教の方々とした時と同じように、AMDAの理事長のメッセージをマシュードさんが読み上げ、私が祈りを捧げ、同じような挨拶をして終わりました。

どちらの会場でも同じで、だれでも写真を写してあげると言うと、とても喜んでくれました。(現在まで、まだ送っていない所があるのが気になっています、早く送らなければ)特に、子ども達が喜んでくれたのが嬉しかったです。

以上が今回のインドネシアでの行動の概略ですが、振り返って考えてみますと、時間的な制約はありましたがもう少し現地の人々とコミュニケーションを積極的に取ることが出来たら良かったと悔やまれます。

それと、タンラ先生・マシュードさんには

大変お世話になりましたが、マシュードさんの高校時代の友人のスチプトさん、その息子さん、息子さんの奥さんのお父さんのアングラヤディ先生(医師)には2日間に渡り大変お世話になりました。まるで自分たちのお客のようにお世話下さいましたことが大きく心に残っています。あつと言う間の旅でしたがお世話下さいました人々のお陰でインドネシアを非常に身近に感じさせて下さったので又機会があれば行ってみたいと感じた旅となりました事を感謝して報告を終わります。

同時に5カ国で実施 — インドネシア(北スラウェシ)
Manado Post Newspaper(マナド・ポスト新聞)
2000年11月30日(木)

全国民のために高まる平和への祈り

社会的宗教的分野で活躍しているNGOのアムダイインターナショナルは同時にアジアの国5カ国(ミャンマー、カンボジア、ベトナム、フィリピン、インドネシア)で全国民のために合同慰霊祭を開催した。

インドネシアでは、この式典は北スラウェシ州のマナドとミナハサで実施された。この儀式にはアムダイインターナショナルを代表して寺田光寂氏が、AMDAインドネシアからMashud Tahir氏が出席した。

アムダイインターナショナル代表の菅波茂理事長からのメッセージを代読した寺田氏は、「アジア5カ国で同時に開催されたこの慰霊祭は、第2次世界大戦に従軍し戦死された勇士の方々のご冥福を祈ると共にその結果として全世界の人々の平和を祈る事を目的としている」と話した。

寺田氏によると、アムダイインターナショナルはこのプロジェクトの準備にあたり出会った全ての人々が第2次世界大戦による悲惨な影響を受けている事を知った。また、いまだに多くの人々がこの戦争の後遺症として大きな精神的外傷に悩まされている事も切実に感じた。

出席者全員で祈りを捧げた後、寺田氏自身が10分間にわたり日本語でインドネシアの勇士の魂と世界平和のために祈った。

式典後、寺田氏とTahir氏は孤児から記念品の贈呈を受けた。

(翻訳 藤井優文子)

フィリピン

AMDA 主催のセレモニーに参加して

棲真寺住職 西 亮天 (広島県賀茂郡)

突然フィリピンに行って法要をして呉ないかと言う話がありました。余りにも唐突な話なので戸惑いを感じましたが、総代長さんの「第二次世界大戦に於いて多数の方々が散華されている上に、現地の民間の犠牲者も少々でないにもかかわらず今迄、日本の宗教者は現地で何もしていないので今回、佛教とカトリック教による合同の慰霊祭を執り行うので行って欲しい」との話を聞き、かねがね私達が今日平和とかつて無い程の繁栄を享受し、かく安らかな毎日を過す事が出来るのは、日本の礎となって戦火の中を散って逝かれた先輩諸兄のお蔭に外ならないと考えていましたのと、また依頼者が「AMDA」即ち国境のない多国籍の医療ボランティア団体という事もあって参加を承諾いたしました。

定年後十五年余も山寺の和尚をしていて、田舎者と言うより仙人に近い生活の私が大丈夫かと不安も無いではありませんが、AMDAの岸田嬢のアドバイスも有り、また、生来の呑気者と言う事もあって何とか成るだろうと踏切りを附けるのは簡単でした。

パスポートの準備、留守中の手配等々あつと言う間に出発日11月24日となり新幹線経由で関空に着き、お上りさんよろしく初めての空港内をきよ

ろきよろ、うろうろ。冬の日没は早く出発の6時10分はすでに真暗で、機上より見える明りは神戸の街の灯りか？しばらく地上の灯りに心をうばわれていましたが、何時の間にか眠っていたので、寒さで目が覚めると早やマニラ上空でした。無事着陸、私の経験からすると検疫、移民局、税関等と考えていたのですが、何も無く流れに従って記入した用紙を一枚渡すだけのいと簡単な入国手続きですべてOK。もっともバゲッジと言えばポストンバック一つ、しかも中味は僧衣とお香、線香が入っているだけ、当然かもしれません。迎えの車で夜のマニラの街をホテルへ、日本と違ってまるで車の洪水です。よくこれで事故が起きないものと感心している間にホテルに着き、部屋に入ってほっとしたのは夜も10時を過ぎていました。

翌朝約束の時間にAMDAの九里氏の出迎えを受けて会場になるスラム街の一角にあるカトリック教会に行き、司祭の方々と佛教式法要の進め方等打合せ、夕方6時より開会にのぞみました。先ず司会の方から今日のセレモニーの趣旨説明とAMDA菅波代表の挨拶文が朗読されました。、引き続いて日本の佛教者と行事の紹介があり、制約の時間内に献香、拝、讀経、回向文奏上と佛式の法要を終了し、

その後カトリックのミサが行われました。私は此の世に生を受けて74年になりますが、初めてミサに同席の機会を戴き、得難い体験と感動を受けました。世界の三大宗教と言われるキリスト教、回教、佛教。かつて我々日本人の家庭に於いても毎日佛壇に香をたき供物をして家族揃って合掌する時代もありましたが、当地では今も毎日神に十字を切って祈りをささげ、今回の行事には幼い子供達から老若男女に至る迄約150名が参加してオルガンに合わせて讃美歌をうたい、それぞれ各自が出来る役目を受け持って行事を進めて行く様子を壇上にて拝見、深く感銘を受けました。頭を垂れて神に祈る人々の敬虔な姿からは、愛や慈しみの心が深く伝わって会場一杯に広がって行きます。そして私にはそれが全世界に大きく繋がって欲しいものと切に願わずにはいられま

せんでした。最後にマニラ市長の謝意があり、私にまで懇な謝辞を戴いて式が終了。思いもかけぬ有意義な時間を過ぎて戴きました。

その後滞比十年余と言う日本人の山頭泰種司祭(今回のミサをフィリピン神父と共にやって下さった)と共に、元マニラ医師会々長のチュア氏のご招待にあずかり夕食を共に楽し

い一刻を得、其の上翌日、遠来の客としてマニラ市内の名所案内をして戴き、旧スペイン統治の色濃く残る城郭に立って、アメリカそして日本もまた一時期支配した時代をも思い合わせ感無量でした。また市内至る所で大戦に破壊されたものも立派に復旧され、中華街も大変な繁盛振り、華僑の方々の立派な墓所に目を見張る三時間余の見物でした。夕方からチュア氏の誕生日パーティーの招待で武装ガードマンの検問を二度も受けてやっとお屋敷に到着、日本では考えられない体験、自國の治安の良さを改めて感じさせられながら盛大なパーティーに時の経つのも忘れる程、明朝の出発のため少々早目に心を残して辞退させて戴きました。

出発時の不安はすべて杞憂、無事帰宅いたしました。振り返って見ますと瓢箪から駒の様な話で参加したフィリピン慰霊祭ですが、今日の私達の平和な暮しの裏には大戦での余りにも大きな犠牲のあった事に、宗教者としてより以前の一個の人間として何時もいただいていた想いの一端を、供養と言う形で表せた事を喜び、この機会を与えて下さったAMDAの皆様に感謝し、旅行中の多くの方々のご好意に深謝してつたない一文と致します。 合掌



国際協力と太平洋戦争

フィリピンASMP (AMDA Soul and Medicine Project)

九里 武晃

東南アジアの国際協力に携わるとき、必ず直面するのがこの太平洋戦争の影響である。大部分のフィリピン人は戦争直後、日本人に対して敵意と恨みを持っていた。実際、両親を日本兵に銃殺されたフィリピン人の方話を聞くと、戦争が過去の事実になっていないと考えさせられることがある。日本人と聞けば、鬼のような印象をもつのは当然であったと思う。未だにフィリピンの従軍慰安婦の問題などが、毎日誌面をにぎわしているのである。

戦後55年が経過した。その間、様々な国際協力ミッションが形成され、フィリピンに援助を行ってきた。

10年前にカトリックのシスターとして派遣されて、マニラのスラム街で働いている加藤さんは、赴任当初、現地のフィリピン人のシスターにとっても親切にしてもらったと語っている。そのフィリピン人のシスターは、両親を目の前で日本兵に殺されたのだそう。戦直後、日本から赴任してきた加藤さんの前任のシスターに対して、自分の中のわだかまりを溶くことができなかつたそう。カトリックの教えでは、『自分を害するものために祈れ』というのがありますが、どうしてもそれができなかつたと言っている。

しかし、戦直後に日本から赴任した前任のシスターは、誠意を込めてフィリピンの人々に接し、貧困の人々のために働きつづけた。このような姿勢が、少しずつ現地の人々にも受け入れられ、フィリピン人のシスターの心のわだかまりも溶けていった。それゆえ後任である加藤さんが赴任したときは、皆、本当に親切に歓迎してくれたのである。このように、過去の戦争を清算することはとても難しく、個人個人の強く長い結びつきでのみ解決しうるのではないかと思っている。

しかし、このような国際協力プロジェクトは、決して多くはない。日本のODAは、世界一の規模となったが、多くの日本のプロジェクトは短期間である。10年以上続くプロジェクトはごく少数であるといってもいいだろう。また、プロジェクト自体で草の根の人々と結びつく機会はありません。例え、機会があったとしても、日本人の中で戦争の意識が薄れており、国際協力と切り離して考える人が増えている。公式には日本政府の戦争の清算はされたことになっているため、ODAと太平洋戦争を結びつけるこ

とができないのだ。さらに、ODAは、基本的に政府間の援助であるが、戦争の心の傷は、政府や自治体などの公共機関が持っているのではなく、まさにその時、その場にいた個人個人とその子孫が持っているのである。いずれにしても、ODAで、太平洋戦争を清算するだけの人と人とのつながりを強化するにはまだまだであろう。

ASMPという発想はここから生まれたかと思っている。日本政府が直接行うのではなく、NGO (AMDA) を介することにより、草の根レベルの長い医療活動ができ、人の結びつきを作っていくのである。また、合同慰霊祭と言う形で、戦争との関係を明確にし、草の根の人々と共に、謝罪をもこめて祈ることができる。

フィリピンのASMPは、AMDAフィリ

ピンの名誉顧問を勤めている元フィリピン医師会長チュア医師が10年前に提案したもので、10年目にしてようやく実現した。第一回合同慰霊祭は、2000年11月25日マニラ市で開催された。

ASMPの目的は、単に過去に引き起こされた過ちを悔やみ、許しを請うものだけではない。現在そして未来に対して日本の戦争に対する姿勢を世界に見せることにもある。

平和憲法に守られた平和国家日本であるが、世界情勢に流され、平和維持に対する確固とした信念を持っていないような気がする。ましてや、戦争の被害者である方々にとって、日本の姿勢が不明確で、理解しがたいものになっているのは当然であろう。

ASMPは、日本の平和主義の実践であり、草の根の人々に私達の平和を望む心を伝えていくことができる。始まったばかりのプロジェクトだが、これが徐々に広がり、より多くの人々に私達の心が伝わることを願ってやまない。

ASMPメモリアルサービスにおけるフィリピン マニラ市長 Lito Atienza氏からのメッセージ

本日は私達が忘れもしない戦争によりもたらされた苦難の日々にとりまして、誠に意味深い日であります。そして主なる神に深く敬意を払います。今夜私達が一つになるために愛と祈りをもたらず助けをして下さった私達の友達は、私達フィリピン人が過去の世界大戦で被ったあらゆる苦難をのりこえて愛と尊敬を心に抱いて世界中の兄弟達と一つにならねばならないのだという事をするして下さっています。

戦禍による、同様の運命を被った人々は大勢います。私もまた戦争による絶えまない恐怖の中に生きてきました。多くの方が戦争で犠牲になり、そしておそらくは全てのフィリピン人の家族が戦争で愛する者を失ったとさえ言いきれぬでしょう。歴史の中のその一時期は、確かに私達がぐり抜けねばならなかつた苦汁の体験の一つです。

他方、私達アジアの兄弟、あの第二次世界大戦をこの国へともたらした日本人もまた、戦争による痛みと苦しみを逃れることはありませんでした。事実、彼らもこの戦いで莫大な損失を被りました。原子爆弾を落とされ、そして今なお彼らの多くがその後遺症で苦しんでいることをお覚えでしょう。

我々のすべて、日本人も、フィリピン人も、インドネシア人も、そして世界中、

特にアジアの人々皆が、戦争による犠牲者なのです。この戦争で、自分達が勝つたのだと立ち上がって言うことができる者は誰もいないのです。戦争はただ犠牲者のみを求め、勝者を生みません。これらの出来事全てから、もし再び戦争が起こるとしても、その戦いによりもたらされる事で良いことは何もないのだという事を学ぶ教訓があるのです。

私達は愛を抛り所として相互理解と共存を目指す組織であるアムダイナターナショナルに対して、この教訓を我々に思い出させて下さった事を心より感謝します。一つの世界の中で、私達の他の兄弟、姉妹達と手を取り合ひましょう。

アムダイナターナショナルはこの地区に沢山の目標と計画を立てています。私達の地区に医療支援を行うため、ここに医療所の建設を目指しています。彼らは本当に他の人々を助けようとしていまして、これはきつと実現するでしょう。彼らは愛と相互理解を示し、広めることで戦争の不幸を私達に思い起こさせたいと願っています。私達は、アムダイナターナショナルの恵まれない人々への善意と献身的な働きを見ることが出来る地区として幸せです。心の底より感謝をします。世界中の平和・共存・愛への願いにおいて、私達は一つです。

(翻訳 森川恵子)

ベトナム慰霊の旅

天理教岡山国際救援委員会代表 平野 恭助

AMDAの依頼を受け11月末ベトナムはハノイへ行ってきた。その依頼とは次の如くである。

ある夜AMDAの菅波代表より電話があった。「平野さん、宗教家にしか出来ないことをお願いしたいんですが、引き受けてくれますか。ルワンダ難民キャンプでの平野さんの沈着冷静な行動と実績を見込んでのことですよ。」と、いつものながらのうまい調子でこちらの自尊心をくすぐりつつ話を持ち出してきた。

今回AMDAが計画しているのは、アジア諸国のかつての戦地において戦死した日本軍関係者と巻き込まれて死んだ現地の人々の「魂の冥福」を慰霊し、残っている現地の人たちの為に「母と子の健康推進のためのヘルスポスト(簡易医療施設)」を建てて国際平和に貢献するといった内容のプロジェクトである。

すなわち私たち宗教家に関係国に赴いてもらって現地の宗教者との合同慰霊祭を実施してもらいたいという依頼である。

対象となる国はミャンマー(元ビルマ)、カンボジア、インドネシア、フィリピン、そしてベトナムの5ヵ国である。太平洋戦争中日本軍の進攻により大小の戦禍を受けた所だ。そういった場所で合同慰霊祭なるものを行うことの是非は判断しかねたが、現地での救援活動の一助になるのであればという思いから私は参加の意を表明し、目的地はタイの信者訪問かたがた比較的に足をのばせるベトナムを選んだ。

他宗の僧侶の方々は仏教国のミャンマーやカンボジアを選択されたため結局ベトナムは天理教の私一人となった。慰霊祭も天理教式ということになり、どう行すべきか経験もないゆえ茫洋たる思いでいたが、祭文を書く段になって日本の戦争責任という社会的観点からも内容に細心の注意を払わねばならないと気づいた。

前会長である父がその点をいたく懸念し、私に代わって祭文を書いてくれた。他教会にまで行って過去の例文を調べたりしてかなり頭をひねって書き上げてくれたようである。また、役員の方には玉串の準備をお願いしたりでご苦労をおかけした。

社や三宝、御幣なども揃えいざ出発となった時、AMDAの鈴木氏より電話があった。「平野さん、すみません、ベトナムは社会主義国で他国の宗教が自国内で宗教儀礼を行うことは禁止されており、今回は天理教としての慰霊祭ができなくなりました」と。出発の直前になってこの通達である。担当の鈴木氏は電話の向こうで平謝りに謝るだけ。普通なら怒り心頭、どうしてくれるかと損害請求でもする処であるが、ここで平静を保つのが宗教家としての真骨頂。まあこれもいつものAMDAの行動パターンが出た

けど気を取り直し、今さらチケットの変更もきかないこともあり、当初の予定通りベトナムに入ることにした。

首都ハノイはベトナム第二の都市である。社会主義国といってもドイモイ政策以来自由主義国の風が吹き込まれ国全体が活気づいたように見えるベトナムではあるが、その中でも思ったよりハノイは落ち着いた雰囲気がある。

合同慰霊祭が行われるのはそのハノイから約200キロメートル離れたタイピンという貧しい町である。空港からタイピンへ向かう車中、現地AMDA駐在代表の大川氏がベトナム事情を色々語ってくれた。

やはりベトナムは社会主義国の旧態依然たる因習がまだ色濃く残っており、特に政府にあたる人民委員会の権威が強く、何事も人民委員会にスジを通さねば物事が成り立たない。今回の合同慰霊祭も話が出てから一ヶ月足らずであったが、本来なら半年以上も前から準備し許可を得るべく

事を運ばなければならない。つまり人民委員会との調整が十分ではなかった。それでも宗教がこの国で慰霊祭を行うことが認められたということ自体画期的なことだと大川氏は云う。

結果的にはベトナム国内の仏教寺院で現地の僧侶を中心として慰霊祭が行われたのであるが、外国の他宗教が宗教色を出してそれに当局が参加するという形式はまだ不可能なのであろうと私なりに理解した。

慰霊祭は聖隆寺という寺院で行われ、当日ベトナムからは僧侶・信徒約百余名の他、人民委員会の幹部や現地関係者十数名が列席し、日本からはAMDAの鈴木氏に現地スタッフ、またベトナムとの取引関係にある中小企業の社長さんたち十数名が参列した。私の立場は日本からの「一参加者」であった。

一回目の慰霊祭は終わったがAMDAが今後この地にヘルスポストを建て救援活動をするには色々配慮しなければならない点も多々あるようだ。人民委員会との関係を円滑なものに保たねばならないし、またヘルスポストを適切な場所に設置するためにも大使館とのコミュニケーションを密にとっておかねばならない。さらに建設費・運営費といった経済的な支援は先の企業の社長さん等もある程度バックアップしてくれるとのことであるが、肝心の人材即ち医療スタッフがどれだけ確保でき、どれだけ永続的に勤められるかが問題であろう。

ベトナムの医療はまだ発展途上にあり、また病気になってもお金がないため病院へ行けない貧困家庭が多いと聞く。そんな中AMDAがヘルスポストを建て医療支援をすることは大いに意義深いことであり、是非ともこのプロジェクトは成功してほしいと切に思う次第である。



ASMP (AMDA Soul and Medicine Program) 合同慰霊祭

“ミャンマー訪問団” 活動報告

AMDA ミャンマープロジェクト駐在代表 小林 哲也



1. 慰霊祭実施期間

平成 12 年 11 月 25 日(土)～11 月 30 日(木)

2. 慰霊祭実施場所

ミャンマー連邦マンダレー管区3ヶ所 (メッティエラ、マグウェイ、チャパタウン)

3. 慰霊祭参加者

中島 妙江 上人 (宗教者)

大瀬戸 泰康 上人 (宗教者)

木山 道宏 様 (随行者)

寺田 千代 様 (随行者)

小林 哲也 (AMDA ミャンマープロジェクト駐在代表)

ウソーテン (AMDA ミャンマープロジェクト
メッティエラ事務所スタッフ)

4. 慰霊日程及び場所 (慰霊対象)

11 月 26 日 (日曜日)

メッティエラ市 ナガヨンパゴダ

(日本人及びミャンマー人戦没者)

パゴダ代表者：サヤドー ウェインダカ大僧正

特別招待者：メッティエラ市サンガ協会長
サヤドー ウオッタラ大僧正

11 月 27 日 (月曜日)

マグウェイ市 ジャンタイ ポンジー サーティンジャン
パゴダ (同上)

ゴダ代表者：サヤドー ウスマンガラ大僧正

特別招待者：マグウェイ管区次長 ウキンマッエー氏

11 月 28 日 (火曜日)

チャパタウン市 シェウエ タンサーパゴダ (同上)

パゴダ代表者：サヤドー ウチョーティヤ大僧正

特別招待者：メッティエラ市消防署長 ウハンマン氏

11 月 29 日 (水曜日)

バガン市旧市街 (上記戦没者、及び少数民族の犠牲者)

5. ASMP 合同慰霊祭 ミャンマー訪問団活動記録

■ 11 月 25 日(土) 一初日ー

いつものように、飛行機が到着してから約一時間後、夜の7時半を少し回った頃に、笑顔の中島上人を始めとする慰霊団の方々が、ヤンゴン国際空港の到着ロビーに姿を見せました。日本からの長旅にもかかわらず、皆様お疲れの色もなく元気な様子で、私の心配は吹き飛びました。その後、皆様をホテルにお送りし、夕食を兼ねて簡単な打合せを行いました。

今回の訪問地は、ミャンマー中部地方の乾燥地帯に位置する3都市です。第二次世界大戦の激戦地として語り継がれ、AMDAが医療・福祉プロジェクトを展開しているメッティエラ市を中心に、チャパタウン市、マグウェイ市の3ヶ所を訪問し、それぞれのパゴダで、ミャンマー人僧侶の方々と合同で慰霊祭を行います。訪問団は岡山からいらっしゃった宗教者の中島上人を代表に、同じく宗教者の大瀬戸上人、中島上人ご友人の木山様、そしてご主人が宗教者である寺田様の4名で、AMDA ミャンマープロジェクト駐在代表の私とメッティエラ事務所プロジェクトマネージャーのウソーテンが同行します。

明日は早朝六時半の飛行機でマンダレーに向かわなくてはならないので、今日は早めに切り上げ、皆様にゆっくりお休み頂くことにしました。明朝は何と4時半起き！です。

■ 11 月 26 日(日) ー2日目ー

早朝のヤンゴン空港は、各地に行く観光ツアー客でかなり混雑していました。飛行機の便もたくさんあるので、どうしても少しずつ遅れがちで、我々の便は結局30分以上も遅れて出発しました。私が心配してうろうろしていると、大瀬戸上人が「こんなこと慣れてますから、そんなに気を遣わなくていいですよ。」と逆にフォローして下さいました。

マンダレー新空港に到着すると、ドライバーのトントン (AMDAスタッフ) と日本語が話せるウソーテン (同上) が既に我々を待っていてくれました。マンダレー新空港は今年の夏にオープンしたばかり。まだピカピカの施設なので、皆様「こんなところにこんな凄い空港があるの？」と大変驚かれていました。

マンダレーから車に揺られること2時間半でメッティエラに到着。昼食後に早速、今日の慰霊祭会場となるナガヨンパゴダに向かいました。このパゴダは第二次世界大戦中のビルマ (当時) で、戦闘中や敗走中、旧日本兵が当時のビルマ人に現地で大変お世話になったということで、戦線で一命を取り留めた方々が終戦後、日本人、ビルマ人を問わず全ての戦没者の霊を弔うために建てたパゴダです。今でも遺骨収集団がお立ちよりになり、また戦友の死を弔う墓参団として、毎年多くの日本人の方々がお参りにいらっしやいます。その意味でもこのパゴダは、今回の慰霊祭に

ミャンマーでのASMP慰霊祭 第1日目 (メッティーラ市)
メッティーラ市サンガ協会会長
ウオッタラ大僧正による歓迎の辞

まず始めに、仏陀のご加護により、大瀬戸上人や中島上人を始め、今日参列している全ての僧侶と市民の幸福を祈ります。今日、2000年11月26日に、我がナガヨン・マハポディパゴダにて、このような慰霊祭を開催出来たことは、大変喜ばしいことであります。

第二次世界大戦中、メッティーラ市周辺において不慮の死を遂げた兵士や市民の方々の安寧、そして日本とミャンマーに暮らす全ての人々の幸福を祈ることは、非常に大切なことであり、仏の教えに合うものです。アムダ・インターナショナルの菅波理事長を始め、慰霊祭の開催に向けてご尽力頂いた全てのスタッフの皆さんに心から御礼を申し上げます。

最後に、来年以降も同じような慰霊祭を開催されることがありましたら、私は喜んでその実施に向けて協力し、最大限の配慮をすることをお約束します。

2000年11月26日

ミャンマー連邦マンダレー管区メッティーラ市
ナガヨン・マハポディパゴダにて

まさに相応しい会場と言えるでしょう。

パゴダには、既に大勢の方々がおり、準備を整えて頂いていました。パゴダ内には慰霊祭の会場と、その後の交流会の会場が設けられています。パゴダ管理組合の方が気を遣って日本とミャンマーの国旗まで並べて下さり、合同慰霊祭の雰囲気が高まっています。また祭壇には既に供物としての果物やお花が所狭と並べられており、ここにも日本、ミャンマー両国の国旗が掲げられていました。

会場にはメッティーラ地区のパゴダ全体を管轄するサンガ組合会長のウオッタラ大僧正や、管理組合の執行部の方々も軒並み参列して頂き、今回の慰霊祭への関心の高さが伺えると共に、非常に力を入れてご準備頂いている様子が伝わってきます。

中島上人、大瀬戸上人は会場に入られると式典の準備を始められました。大きなトランクの中には、蜀台や卒塔婆、見台、位牌などが納められており、それらは一つ一つ丁寧に包まれています。中には宗教者の方々以外は触れないものもありますので、安易にお手伝いは出来ません。私には見ているしかないのですが、皆様手際よく準備を整えられました。

1時20分、予定より少し遅れて慰霊祭が始まりました。式典にはナガヨンパゴダの僧侶が25名、管理組合の方々や一般の方々が20名など合計約50名の方々が参列しました。勿論AMDAメッティーラのスタッフも参加しています。司会はパゴダ管理組合で会計を担当するウラディンさんです。まず始めにパゴダを代表して、この地区のサンガ組合の会長でもあられるウオッタラ大僧正が、歓迎と訪問に対するお礼の言葉を述べられました。そして次にAMDAを代表して、菅波代表の挨拶文をAMDA ミャンマー駐在代表である筆者(小林)が代読。代表は挨拶文の中で、アジア各国で第二次世界大戦中に戦死された方々への追悼の意と、開催にご協力頂いた方々への深い感謝の意を表すと共

に、今後は未来世代の健康維持に向けて、医療支援活動をより一層充実させていく決意を示されました。

続いて慰霊祭訪問団を代表して大瀬戸上人よりお礼の言葉と自己紹介があり、上人は「自分の父親は広島原爆の犠牲者だったので、戦争による犠牲者の追悼には特別な思い入れがあります。だから今回、菅波代表からご提案頂いたこのASMPプロジェクトに賛同し、この慰霊祭に参加させて頂きました。他にも参加したいという人間はたくさんいたのですが、スケジュールの都合でどうしても訪問がかなわず、私達がそういった人々を代表して来させて頂きました。ここにいるのは4人ですが、その後ろにはそういったたくさんの方々の気持ちがあります」といった訪問趣旨の説明があり、その後ご参加の皆様をご紹介頂きました。

そしていよいよ慰霊祭のハイライト、日本人僧侶による法要へと移ります。ミャンマー仏教界のしきたりを尊重し、男性の大瀬戸上人が正面に座り、中島上人が後ろでサポートする形でお経を唱えられ、施餓鬼という丁寧な法要と共に、祈

願文を読み上げられました。浅学で仏教に関する知識に乏しい筆者にも、慰霊と供養の気持ちが強く伝わってきました。

その後、ミャンマー人僧侶によるお祈りが捧げられ、慰霊祭は1時間半程で無事終了しました。慰霊祭を終えた大瀬戸上人は、「お経を上げていると、ビシビシと伝わってくるものがあり、自然と力が入りました。最初の部分で魔を追い払い、後の部分で場を整えました。見ている人は奇妙に思われた部分があったかも知れませんが、一連の動作にはそういう意味があったのです」と法要の中身をご説明下さり、感想を述べられました。また中島上人は「ご法要していると、最初の神様が現れました。恐らく土着の神様ではないのでしょうか。今まで見たこともないお姿でした」と、仏教大国ミャンマーならではの感想を述べられました。この神様がどなただったのかは、何と後日きっちり判明することになります！私はますます仏教というものの奥の深さを改めて認識させられました。

■11月27日(月)ー3日目ー

熱帯に位置するミャンマーですが、11月下旬ともなると、中部地方メッティーラの早朝は涼しいを通り越して寒い位です。朝6:30の集合でしたが、遅れることなく全員揃って朝食。5泊6日で3ヶ所の慰霊祭という強行スケジュールにもかかわらず、ASMPミャンマー慰霊団の皆様は、非常にお元気な様子で、本当に心強い限りです。

朝食後の朝7時に出発。目的地は本日の慰霊祭を行うマグウェイという、メッティーラから更に約130km程南下したところに位置する、同じく中部乾燥地域の町です。マグウェイ管区の中心都市で人口は約25万人。

道中はアスファルト舗装されているものの、日本のようなきれいな路面という訳にはいかず、時々大きく飛び跳ねたりします。慰霊団の皆様の荷物が思ったより多かったの

で、4WDの最後部への荷物の積み方を色々工夫。何とかウソーテン一人は後ろの荷台部分に乗れるようにして、前2列でドライバーを含めて6人が乗るようにしました。それでも助手席に2人というのはなかなか狭く、身を少しひねって私が乗っていたら、それを見かねた中島上人が、「一番小さい私がそこに座るのが一番良いでしょう」とおっしゃって、自ら窮屈な助手席に座わられてしまいました。私は「大丈夫ですし、そんなお気遣いは無用ですのでどうぞ後ろの座席に座って下さい。」と丁重にお願いしたのですが、ご上人は私の体をお気遣い頂き、助手席から降りて頂けません。大変恐縮しながら、ご上人のお気遣いのお気持ちに感謝し、図々しく後部座席に座らせて頂きました。

1時間半程走って休憩。明日の慰霊祭開催地であるチャパタウンの小さなレストランで、休憩を取りました。そしてここで何気なく出されたミャンマー風春巻きが大好評。皆様にバクバク食べて頂きました。形が三角形であることと、ちょっとスパイスが効いていて辛目の味付けであることを除けば、皮といい具といい日本の春巻きと全く同じで、大変美味しいヒット商品でした。更に、大瀬戸上人がご持参された練り辛子と醤油を途中で味付けに追加したところ、この春巻きにぴったりということが判明。更に一皿が追加されたことは言うまでもありません。

更に2時間半程走って無事マグウェイに到着。昼食後、今日の開催場所であるジャンタイボンジーサーティンジャンパゴダに早速伺いました。このパゴダは91年に設立された、大僧正の養成学校で、広い敷地内にはいくつもの建物や講堂があります。これまでに102人のお坊さんがここを卒業し、大僧正として各地のパゴダでお勤めをされていて、日本にいられている大僧正もいらっしゃるそうです。現在は33人のお坊さんが修行されています。

ASMP慰霊祭のために、この日は大きな講堂をご提供頂きました。正面にご本尊様が祀られており、学校の研修などで使用する場所だそうです。既にマグウェイ管区次長のウキンマッエー氏が来られており、次長が式典を取り仕切って下さっていました。

1時15分、慰霊祭が始まりました。会場には僧侶約15名、宗教省の関係者10名、そして檀家の信者の方々20名など合わせて約50名が参列しました。最初にパゴダを代表してウスマンガラ大僧正から歓迎のご挨拶があり、「訪問を心から歓迎する。仏教には古くから『いま生きている人は、亡くなった方々のために何かをしなさい』という教えがある。そして心と体と口とで良い行いをしなさいと言われていた。その意味でも今回のAMDAを心から歓迎する。今後とも全面的にサポートしていきたい」という趣旨のご挨拶を頂きました。そして上記メッティーラでの慰霊祭と同じく、AMDA代表の挨拶文を代読、ASMPプログラム趣旨のご説明、そして大瀬戸上人のお言葉に移りました。その後はいよいよ慰霊のためのご法要開始です。今回は、まず始めにミャンマー人僧侶の方々が祈りし、僧侶の方々全員でお経を上げて頂きました。そしてその後、中島上人と大瀬戸上人による慰霊祭が始まりました。今回は前半、「木剣」という戦没者の霊を慰める最も丁寧な法要、そして後



半は仏様への法要という構成で行われました。大瀬戸上人のお話によると、日頃のお祈りなどが特別にきちんと行われているためか、今回の法要の方が、負担が軽くスムーズだったようです。そういうことが全く分からない私にとっては、非常に興味深いお話でした。

お2人の上人によるお祈りは約40分で終了し、大瀬戸上人が改めてお礼を述べられ、式典は約1時間20分ほどで無事終了しました。式典終了後には参加して頂いた方々にジュースが振舞われ、しばしの歓談なども行われました。

しかし今日はこの後、宿泊地であるパガンまで向かわなければならないので、荷物を大急ぎでまとめて車に積み込み、パガンに向けて出発しました。帰りの車内は、朝5時半起きで車に揺られること4時間、このような強行慰霊祭に元気一杯の慰霊団の方々もさすがにお疲れの様子で、ホテルに着くまで、皆様少しお休みになっていらっしゃいました。

■ 11月28日(火) — 4日目 —

連日の強行軍で慰霊団のお身体が心配でしたが、ここまで皆様に何とか頑張って頂きました。日程前半のスケジュールがハードだった分、今日は比較的余裕があります。朝はこれまで4時半起きや5時起きでしたが、今日は8時、9時に朝食を取ってから、最後の慰霊祭を行うチャパタウンに向かいます。パガンからチャパタウンまでは車で1時間弱。これまで一日に8時間も車に揺られていたことを思えば楽勝です。

チャパタウンに到着すると、今回の慰霊祭を現地で全て取り仕切ってくれた、市の消防署のウハンマン署長がいらっしゃいません。どうやら彼は、我々がメッティーラから来ると思っていたようで、メッティーラ方面の街外れまで車でわざわざ出迎えに行ってくれていたようです。連絡を受けて戻ってきた署長は、赤い車体に金色の文字で「福島県岩代町消防団」と書かれた消防車に乗って現れました。非常に気のいい署長さんは、我々がお供えのおもちが無くて困っていると聞くと、すぐに作るよう奥さんに手配してくれました。こういう皆さんの親切は本当に胸に染みます。

この地域は乾燥地帯なため、火災が非常に多いことが問題になっています。そのためAMDAでも今年、防災学校を



建設して防災トレーニングを行うと共に、防災小屋などの建築、水タンク及びホースなど備品の供給などを行い、地域の防災体制の整備に協力しています。

チャパタウンでの慰霊祭は、街中から5分ほど離れたところにあるシュウェタンサーバゴダで行います。そのためそこまで移動するのですが、何と署長さんが消防車に乗せてくれました。慰霊団のメンバーは生まれて初めて消防車の、しかも後ろの荷台に箱乗り状態で乗って大喜び。中島上人まで消防車を楽しんでおられました。

このバゴダは約700年前に建てられた由緒あるバゴダで、耳飾りをした仏様が祭られていることから、その名がつけました。「シュエタンサー」とは、ミャンマー語で金色の耳飾りをした仏様という意味だそうです。しかし耳飾りをしている仏様など通常は有り得ません。何故、耳飾りをしているのかを尋ねると、大僧正自ら、「その昔、時の権力者が『自分より美しいものなど、この世に存在しない』と豪語しているのを聞いた当時のお坊さんが、彼を戒めるために『いや、もっと美しいものがあります』と言い、この仏像を作らせてその権力者に見せたのです。絶大な力を誇る権力者も、さすがに仏様に対しては何も言うことが出来ず、黙するしかありませんでした。」というエピソードをお話下さいました。

慰霊祭を行わせて頂く講堂には既にお供えや花などがセットされていて、我々は早速準備に取り掛かりました。中島上人がおっしゃるには、この講堂のお釈迦様は非常に気難しい性格であり、全てをよりしっかりやらないと駄目だとか。既に2回開催して慣れてきたところなので気を緩めるな、ということでしょうか。最後の慰霊祭ということもあり、準備にも自然と力が入ります。

午後1時30分、慰霊祭が始まりました。今日は一段と参加者が多く、お寺の僧侶25名、市の宗教局、地域開発局などのスタッフ45名、村人など一般参加者25名、合計100名近い人が参列し、最後を飾るに相応しい立派な慰霊祭となりました。ただ署長以下、消防署のスタッフも殆ど参列していたのを見て思わず、「いま火事が起こったらどうするのだろうか?」と、個人的には変な心配もしてしまいま

た。しかし、こちら辺のおおらかさがミャンマーという国の非常に大きな魅力でしょう。

最初にウチョーティヤ大僧正からご挨拶、そしてAMDA駐在代表の小林が菅波代表の挨拶文を代読した後、大瀬戸上人がお礼と参加者の紹介をするという前回と同じ形式で慰霊祭は進みます。その後、参列したミャンマーの僧侶によるお祈り、そして中島上人と大瀬戸上人によるご法要へと続きました。

慰霊祭は約1時間20分ほどで無事終了。参列者にジュースなどが振舞われた後、解散となりました。その後慰霊団一行は大僧正のご厚意で、耳飾りのついた仏像を実際に拝見させて頂きました。大きな仏像かと思っていたところ、実物は高さ30cm位の小さなものでしたが、きれいな耳飾りや指輪が異彩

を放っていました。時の権力者に対するこれ以上の痛烈な皮肉はないでしょう。作られた僧侶の機転に感心させられました。そして何と中島上人が、「メッティーラで最初の慰霊祭の時に現れたのは、まさにこの姿の仏様だった」とおっしゃるではありませんか。耳飾りのついた仏様の存在など知る由もない中島上人が、そのお姿にメッティーラで既に会われていたのです。とても不思議なことですが、こういったことが実際にあるのだということ始めて実体験しました。

慰霊祭を全て終えた慰霊団は、バガンのホテルに戻る途中、バガンの中にあるユアハウンジバゴダに立ち寄りしました。ここは、バガンにあるバゴダの中で、上に登れる数少ないバゴダの一つです。昔はもっと多くのバゴダに登れたようですが、現在では遺跡保存のため、殆どのバゴダでは登ることを禁止しています。そして同じく遺跡保存のため、バガンにはバゴダ以外に高い建物は全くありません。従ってバガンの遺跡群を一望出来る場所は登れるバゴダだけであり、特に夕日が沈むころには、登れることで有名なバゴダは大混雑します。しかしこのユアハウンジバゴダはガイドブックなどにもあまり紹介されていないので、観光客で混雑していない穴場です。この日はあいにく雲が多く、夕日に沈む遺跡群という光景は見られませんでした。それでも無数のバゴダが点在する光景には、慰霊団の皆様も大変な感銘を受けておられたようです。

■11月29日(水)ー5日目ー

この日は、元々はゆっくりバガン観光をして頂く予定でしたが、中島上人が「バガンにもたくさんの犠牲者がいる」とおっしゃり、その方々のご供養をご希望されたため、急遽、簡素ながら慰霊祭を行うことになりました。特に少数民族の犠牲者が多く、その方々の供養が必要とのことでしたので、この国の少数民族に多いキリスト教信者のために十字架を手配。供物もぶどう酒などを用意し、イラワジ川が一望出来る高台に位置しているホテルの庭をお借りし、慰霊祭をとり行いました。仏教にこだわらず、キリスト教でも何でも、大戦の犠牲者を弔われたいという中島妙江上人のお気持ちには大変な感銘を受けました。

この慰霊祭をもって今回の慰霊団の仕事は全て終了。大役を無事務められた中島上人もほっとされた様子で、ようやく肩の荷が下りたようです。

現地での活動は終了し、バガン空港から飛行機でヤンゴンに戻ります。飛行機はほぼ定時に出発。定時にヤンゴンに到着しました。ホテルに荷物を置いた後、皆様のご希望で、仏教関係の品物を扱う店が立ち並ぶ地域をご案内しました。ここはヤンゴン最大のお寺、観光地としても最も有名なシュウエタゴンパゴダの東隣に位置し、シュウエタゴンに併設されている僧院学校にも近いので、僧衣や托鉢の壺など、仏教の品物を扱う店が多く並んでいます。やはり中島上人も大瀬戸上人も宗教者ですから、

こういった品物には非常にご関心が高いようで、珍しい品物について色々質問されていました。



■ 11月30日(木) —最終日—

この日は朝、シュウエタゴンパゴダを見学して頂いた後、中島上人ら三名を空港にお送りし、その後大瀬戸上人を宗教省へのご挨拶にお連れする予定でしたが、宗教省の広報局長との面会が朝9時にセットされてしまったため、急遽日程を変更。シュウエタゴンは遠くから拝むだけで次回のお楽しみとさせて頂き、全員で宗教省を訪問しました。サンルウィン局長はASMP一行を大いに歓迎され、来年以降ももし続けるのであれば、全面的に協力すると力強いお言葉を頂きました。そして仏教の経典や歴史について、4ヶ国語で勉強出来るコンピュータCD-ROMをお土産に頂き、コンピュータに詳しい大瀬戸上人は「これは珍しい！」と大喜びでした。その後、中島上人ら三名、そして大瀬戸上人をお見送りさせて頂き、プログラムは全て終了しました。

浅学ゆえに宗教に関する知識に乏しく、そのため当初、個人的には「何か失礼があっては申し訳ない」と少し躊躇していたASMP慰霊祭でしたが、慰霊団の皆様の甚大なるご協力によって、何とか無事に終了することが出来ました。至らぬ点が多く、「あれはこうすべきだった」などと後悔したこともたくさんありましたが、皆様はご不満の様子など何一つ見せず、逆に私を労って下さいました。このASMPを成功に導いて下さった皆様には、本当に心から感謝申し上げます。そして表面上の形に囚われていた私に対し、ご上人は「宗教は表面上の形式ではなく、心のあり方、中身が大事だ」ということを、改めて教えて下さいました。ご参加頂いた皆様、大変お疲れ様でした。来年もまたASMP慰霊祭を開催し、皆様にミャンマーにお越し頂けることを心から願っております。

ASMP (慰霊祭) の意義

—仏教の心が息づく国・ミャンマー—

2000年11月末、ASMP合同慰霊祭のためにミャンマー連邦を初めて訪れました。訪問前、未だ見ぬ慰霊実施先(パゴダ)へのご挨拶を兼ね、岡山で21日間のご祈禱をあげてから現地に赴きました。滞在5日間は、第二次世界大戦などを含む日本が犯した戦争犯罪に対するお詫び、また日本人及び現地戦没者の霊への慰霊を心を込めて勤めました。また予定の3ヶ所だけでなく、経由地のバガンにて法要の必要性を感じ、ミャンマーに存在する100余の少数民族への慰霊もさせていただきました。日本国民として、この記念すべき世紀末にAMDAでこのプロジェクトが開始され、参加させていただける機会を得られたことを非常にありがたく思います。プロジェクトに関係された皆様を含め、日本及び現地の神仏、全

ての事象への深謝を込めて、帰国後21日間誠心誠意の法要をあげることで戦没者及び少数民族へのご法要を終えました。

また、今回初めて訪れたミャンマーにおいて、日本国民よりも、ミャンマーの人々の中に、「仏教の心」が息づいていたことに気がつきました。日常生活に大切な心が脈々と続いていることを肌で感じたのです。渡航前は想像もしなかったそのことが、1番驚いたことであり、そのことがなにより印象深く残りました。ASMPプロジェクトは、日本全体からの「懺悔のはじまり」であると考え、貴重な行動を行わせていただいたことをとても嬉しく思います。開催に際してご尽力いただきました現地の小林さんをはじめとするAMDAスタッフの皆様、またご協力いただいた現地の方々に厚く感謝申し上げます。ありがとうございました。合掌

中島 妙江

ホンジュラス便り

AMDA ホンジュラスプロジェクトオフィス駐在代表

前田あゆみ

クリスマスが目前にせまり、必ず聞かれるのは“クリスマスはどうやって過ごすの？”

ホンジュラス人にとってクリスマスは家族と過ごす日。24日の夜は教会のミサに出て、家族と共にクリスマスを迎えます。こちらのクリスマスメニューは私が以前いたパナマの田舎とは大違い。パナマではチキンピラフとポテトサラダというのが定番メニューで、訪れる先々でごちそうになりました。ここホンジュラスのクリスマスディナーは豚か鶏もしくは七面鳥、それとタマルが必須です。タマルはとうもろこしの生地に味付けしてバナナの皮でくるんで蒸したもので、中華ちまきのとうもろこし版、という感じです。飲み物は卵と焼酎などで作るロンポポ(英語ではエッグノック)、デザートはパンを揚げて甘く煮たトレハ、という様にどの家でも大体同じメニューです。

さて最近の大まかな活動報告です。

RAA ボランティアとの忘年会

今年の活動の締めくくりとして、またボランティア同士の交流会も兼ねて、12月15日に忘年会を実施しました。コミュニティセンターに集まり、みんなで食事をするという地味なものでしたが、メレンゲの音楽をBGMに、和気あいあいとしたパーティーとなりました。パーティーの最後にはボランティア各自に救急箱を寄付、またクリスマスプレゼントとしてAMDA特製かばんをプレゼントしました。救急箱の薬品を使い切ってしまったらRAA内のコミュニティドラッグストアの収益から補充します。

エイズキャンペーン

12月1日はエイズデー。前日に保健省メトロポリタン支部長の伴侶がなくなったということで、12月1日に予定されていたキャンペーン活動はすべて中止になりました。せっかく準備したのに実行しないのは惜しいので、サンフランシスコヘルスセンターのスタッフと協力して、12月14日に日程を変更してキャンペーンを実施しました。

道路脇のバスケット場でやるはずが、手違いで(意志の疎通が不十分で、ホンジュラスではよくあることです)交通量の多い道路から少し奥まったサッカー場で実施することになってしまいました。とはいえ周囲のコミュニティからまずまずの数の人がおとずれ、ひとまずは成功。エイズについての情報普及がキャンペーンの最大の目的で、エイズについてのパンフレットを配布したり、視聴覚機材を用いてのエイズ予防教育を行いました。 Condomも配布しましたが、既婚女性の多くは恥ずかしがって受け取りませんでした。聞いてみると、家で使用していないとのこと。 Condomについて話すことがタブー視される、女性からつけるようにはいいにくい状況がある(浮気をしているのではと不審に思われてしまう、男性側が受け入れない等)、なぜ使用した方がいいのか知らない、といった理由が考えられます。一人の男性に女性は7人などと豪語する人がいるほどの国で、体の構造上感染の危険が男性より高い女性自ら予防をしていないとなると、女性に対する感染の可能性はさらに高くなります。今後、ヘルスボランティアと共にどのようにコミュニティレベルでエイズ予防活動を行っていくか考えていこうと思っています。

セイバの幼稚園(20ヶ所)への救急箱の寄付

12月21日に、2年前のハリケーンミッチの際に大被害を被りAMDAが医療チームの活動拠点となっていたセイバ市を訪れました。市役所が国連の支援を受けて実施している“シングルマザー社会経済再統合プロジェクト”



FFS(健康振興財団)によるエイズセミナー



サッカー場で催したエイズキャンペーン



救急箱、AMDA特製バックをプレゼント

で建設された保育所に対し救急箱を寄付するためです。このプロジェクトは2本柱で、シングルマザー達によるマイクロ企業支援、働きやすい環境を作るための保育所建設から成っています。企業支援では、お菓子工場、ベッドカバー工場等が機能し始めているそうです。保育所はセイバ市内で20ヶ所建設されました。各保育所で50人程度の入所を見込んでいます。救急箱には風邪薬、咳止め、応急手当用品、しらみ退治薬、Colgateから寄付を受けた歯ブラシ、歯磨き粉等子供用の薬が入ってます。今後足りなくなった薬品は保健省の地域局が補充していきます。

上記以外にも、RAAでの排水溝建設、トロヘスでの保健プロジェクトのフォローアップ等を行っています。これらについては後日報告させていただきます。

Can You Imagine?

◇
コミュニティサービス局 岸田 典子

私、コミュニティサービス局・アフリカ担当の岸田典子は12月2日～26日、ケニア、ジブチ、ザンビア、ルワンダへ出張いたしました。短い期間ではありましたが、現地事務所での活躍を実際に感じた出張でした。そのため、今回は出張報告としてプロジェクト内容とともに第一線で働く人々について書かせていただきます。

ケニアは、ナイロビ事務所より車で10数分のところにあるキベラという人口60万人とも100万人ともいわれるスラムを中心に活動を行っている。事務所で働く藤井舞さんはナイロビのスワヒリ語学校を卒業後、AMDAケニアで2年前よりボランティアとして活動、その後現地で採用となった職員だ。彼女はマイクロクレジット(スラムに住み、生活の糧を得るチャンスのない人に低利子で少額貸付を行い、商売をする等自立を促進するプロジェクト・ABCプロジェクト及びジャワカリプロジェクトの一部)の担当をしている。彼女と一緒にスラムへ行くと「じゃあちょっとあっちにいますので」と、数ヶ月後に行くと道が変わっているというスラムの中を、子どもたちの「HOW ARE YOU?」(外国人を見るとなぜかこう言う。藤井さんによると言い過ぎて息を吸うのを忘れて、夢中になって外国人について行き、道に迷ったりする子もいるらしい。)の声を軽やかかわしながら消えていく。マイクロクレジットの受益者の家庭訪問だ。受益者との良い人間関係のみならず、根気の要る仕事をスワヒリ語を使い軽々こなしている。

ジブチでAMDAは市内唯一の産婦人科病院の再建をお手伝いしている。ダルエルハナン病院再建プロジェクトだ。ここには産婦人科医師、伊藤まり子先生が4月より派遣されていて、この12月に帰国となる。この間、1500名以上の患者を診察した。ジブチは過ごし易いと言われる12月でさえ暑く、夏など常にドライヤーの熱風を浴びている状況となるそうだ。また、病院の設備も整っておらず、そんな中での診療活動は想像以上に大変だと思う。にもかかわらず、伊藤先生は「最初は大変

だったのよ、でもハンさん(AMDAジブチ駐在代表)が頑張ってくれて、大分良くなったのよ」と言われていた。私は伊藤先生の力も大きいと思うが彼女はそう言わない。私がジブチで体調を崩しかけたときも自身が日本から持ってきたかぜ薬を私に全部くれようとされ、驚いた。ご自身がこれから風邪になったらどうするのか?と心配すると「私は医者だから何とかかなるわよ」と言われた。簡単に人を優先する。

ザンビアはJICAと連携したプライマリーヘルスケアと関係しながらABCプロジェクト等を行っている。ABCプロジェクトは縫製技術を教えると共に識字教育も行っているという特徴がある。生徒達は入校時、全く読み書きができないが数ヶ月後には自分で書いた卒業の言葉を読み卒業していく。その先生がイボンヌ ムテガ(Yvonne MTEGHA)さんだ。彼女は昨年9月にザンビアにある識字教室の先生中、最優秀の先生に選ばれた。彼女はマイクロクレジットの担当補助もしているのだが、予算等の関係上新しい受益者に対するマイクロクレジットの拡大ができるかどうか微妙な状況であるザンビアで、「週1回の受益者ミーティングは必ず行ってみせる。私ももっと補佐できるように勉強する。だから、やらせてほしい。」と言ってきた。マイクロクレジットは成功要素となる受益者の週一ミーティングがなかなか行えない等問題もあるが、成功するとスラムに住む女性達が自立していけるという効果がある。イボンヌさんが受益者を拡大したいという熱意は受益者となる生徒達が努力をして文字を覚えていく姿とその現状を日々見ている中から出てくるのであろう。

ルワンダでもAMDAの方ではないが、活躍されている女性に出会った。90年代半ばにルワンダにはいられ、内戦等で足を無くした人のため、義足を作るローカルNGOを立ち上げられた方である。今までに300以上義足を作られたそうだ。ルワンダは日本人が非



ケニア：キベラスラム



ザンビア：コミュニティファーム

常に少ない。そんな中、一人でNGOの運営をされている。最近、義足をはめた人への雇用促進と、寄付にばかり頼ってられないという考え等から、宿泊施設とレストランの運営も始められた。商業的なことをするのは抵抗もあったようだが、そう決断された。

以上、アフリカ各国のNGOで働く女性達です。藤井さんに聞いたのですが、ケニアでは相手とのミスコミュニケーションが起これそうになるとしばしば「Can You Imagine?」(想像してみよ。私の立場に立ってみよ)という出だしから、相手の理解を得るよう説明を始めるそうです。今回の出張で、本部で仕事をするにあたりプロジェクト業務はもちろん、相手の立場に立つ、自分の立場を理解してもらう、ということも大切なことだと思いました。そういう意味でも、今回現地で実際仕事をされている方々がどのように生活し、考えているかを知る良い機会を得ることができたと思います。

今後、色々な場面でミスコミュニケーションが起これるかもしれませんが、そんな時には「Can You Imagine?」の精神を発揮し、理解し合いしたいと思います。

二度目の冬

コソボ・プロジェクト事務所 駐在代表代行 濱田 祐子

コソボの冬

コソボ紛争後二度目の冬がやってきました。紛争を終えたばかりの前の冬、国連軍によって地域の安全は保障されたものの、電気や水もなく、人々はマイナス何十度以下にもなる中を真っ暗闇で凍えながら過ごしたそうです。そのような中で、近藤(佐藤)麻里さんを代表とするAMDAは、無料診療所運営、医療施設の再建、医薬品や医療器具の配布等の懸命な活動によって、現地の医療状況の改善に貢献してきました。

一年経った今冬も、まだ深夜12時以降の外出が禁止されていたり、電気や水等の公共サービスが復旧されていません。しかし、人々は徐々に落ち着いてきています。「この冬はまだいい、前の冬ほど辛い冬はなかった」と言うのをよく耳にします。これは、コソボが緊急事態から復興の段階に移行したということを示す象徴的な意見だといえるでしょう。

ファミリーヘルスセンター

緊急事態の終結に伴い、MSF(国境なき医師団)、IRC(International Rescue Committee)、CARE、カリタス等大手のNGOが活動規模を縮小したり、コソボを去ってゆく中で、AMDAは長期的に医療システム復興に尽力するNGOとして地域の保健機関や住民から多大な期待をよせられています。

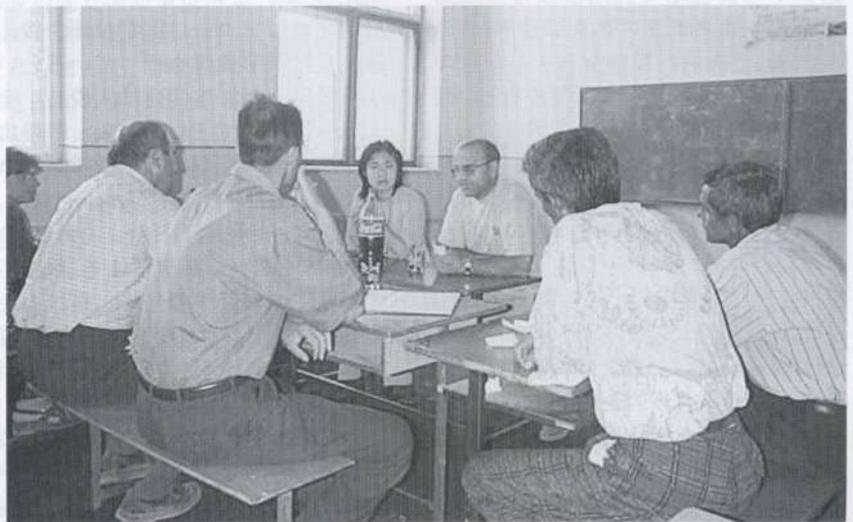
地域の期待をうけて、今年からAMDAは、UNDP(国連開発計画)の協力を得て、「ファミリーヘルスセンター」といわれる診療所の建設を計画しています。手続きのため未だ準備中ですが、早ければ今年の3月か4月から着工にこぎつけられると思います。

現在、コソボ自治州内の殆どの診療所は、設備不足でまともな治療を行える状況ではありません。故に本来は二次的治療を行うはずの病院に、全ての患者が殺到しています。我々の建てるファミリーヘルスセンターは、一次的医療を主な目的とした診療所です。このプロジェクトで州内4つの県(プリ



燃料の薪を運ぶアルバナの子どもたち

アルバナ村でのミーティングには地元のさまざまな人が集まった



ズレン・ベア・ジャコバ・イストック)に6ヵ所の診療所を建設しようと計画しています。そのうちプリズレン県に建設を予定している「アルバナファミリーセンター」について説明させていただきます。

アルバナファミリーセンターは、コソボ南部のアルバニアとの国境に接するプリズレン県郊外にある既存の診療所を再建してつくられます。この地域の住民は、人口の大半を占めるアルバニア系、貧しい世帯の多い少数民族のロマ系の人々や、比較的裕福なボスニア系の人々が暮らしていました。そこに紛争によって700人あまりものアルバニア系難民がなだれ込んだのです。

ところが、ここにはいつ壊れてもお

かしくないような古い小さな診療所しかありません。もちろん水さえなく、十分な医療器具もありません。このため、住民は十分な治療を受けることが出来ず、遠く離れた、混雑しているプリズレンの病院に行くという選択肢しか残されなくなります。

このアルバナに診療所を建設することは、プリズレンに殺到する患者を分散させる効果が期待できることから、地域の保健関係者からも強い要望が寄せられています。新しくできる「アルバナファミリーセンター」は、アルバナと周辺の5つの村々の住民を含めた、約13,000人を対象にしています。

このプロジェクトはUNMIK(国連コ

ソボ暫定統治機構)が提案した、「ファミリーメディスン」と呼ばれるガイドラインに忠実に計画されています。このガイドラインは、1)小規模の外科手術をも含めた基本的な治療、2)緊急医療の24時間体制、3)往診、4)予防教育の4つの骨子からなっています。建物は、高齢者や身体の不自由な人々にも使い易い「バリアフリー」設計にする等、AMDAのこれまでの経験を最大限に生かしたものとなっています。また、診療所が一時的なものになってしまわないように、AMDAの医療スタッフによる現地医療スタッフのトレーニングも行います。

このプロジェクトを計画するにあたって我々は常に村人と意見を交わし、地域のニーズをくみ取る住民参加型のアプローチを取ってきました。このプロジェクトをより良いかたちで実行するためには、各村のリーダー達との話し合い、少数民族をはじめとする家庭への訪問等、まめに足を運び、地元の人との信頼関係を築くことが不可欠です。村でのミーティングでは、女性、少数民族、教育機関や人権団体等の代表者が集まり、プロジェクトについて活発な意見が飛び交います。コソボでは、女性や少数民族が同じテーブルに座って会合を開くことはめずらしいことです。これらの集会は、自分たちの手で、民主的に、地域を復興させるのだという意欲を高めるのに役立っています。村の人たちは、「今まで私達は抑圧され続けて来たため、自分たちで自分たちのことを決定するという事はなかった。プロジェクト実行のために私達の意見を聞きに来て、意志を尊重してくれてありがとう」と口を揃えて言ってくれました。

プロジェクトの開始に向けて

冬のコソボでは、午後3時過ぎには日が落ちてしまいます。加えて1日に何度も停電が起きます。停電が長く続く時には、AMDA事務所の隣にあるレンガづくりの家がにぎわいます。国際警察官達の住むこの家には大きな発電機があって、彼ら警察官の友人や、他のNGOや国連の職員たちが暖をとり集まってくるからです。ストーブを囲んで雑談をしながら、時にはビールも飲んで寒さを笑いで吹き飛ばします。このような人と人とのつながり合いが大変助けられています。

アルバナ村長からの手紙

プリズレン県の郊外に位置する私たちの村は、創立以来40年になります。著しい人口増加に対して、村では計画性のない政策のために十分に生活水準を保つことが出来ていません。例えば現在でさえ、水も用水路もありません。学校もとても小さく、基本的な教育さえ与えられないような状況です。診療所はとても小さく、村の人口に見合いません。村の人々はこうした問題に何とか対処しようと努めていますが、とても困難です。しかも、上下水道設備の不足は、多くの村人の健康を蝕んでいます。特に子供への影響は深刻です。現在の診療所はとても規模が小さく、とても診療に十分とはいえません。

我々の村の人口は7,500人ほどでしたが、いまは700人あまりの難民を抱えています。またボスニア系が42世帯360人、ロマ系が27世帯260人も暮らしています。この村の民族間の関係は「忍耐」と「理解」のことで象徴されます。これは難民にとっても同じです。

我々は、村の病者を救うための新しい診療所を建設するというAMDAの支援を心待ちにしています。また、アルバナ村周辺の人々もこのセンターの設備を享受できるように願っています。

アルバナ村のリーダー
ミラジム・ホージャ

Our village (suburb) called Arbana in Prizren is a dwelling founded these last 40 years. Increasing of this village was very fast and unplanned by the state so that it couldn't answer the conditions and the standards of the population for the normal life.

Even now, we are without water and canalization. There is a very small school that can't fulfill even the elementary conditions for education. An ambulance is too small to answer the number of the population and the standards of the time that we are living.

The population of our village is trying to do the best to make these problems smaller, but it has been difficult to solve. Moreover, the problem such as lack of water and drainage lead to the bad health of our people. Many people especially children are getting infected. The existing ambulance in our village is too small to fulfill the needs of the villagers because its capacity is very small to serve the patients.

There are about 7,500 inhabitants and about 700 refugees in our village; there are also 42 bosnian families with 360 inhabitants and 27 roman's families with 260 inhabitants.

The relationship here is characterized by the tolerance and well understating among our village, and it is the same for refugees.

We are asking with this Request from AMDA for help in building a new ambulance that could help and serve the patients. We also think that some villages that are surrounding our village could use this ambulance.

The leader of ARBANA
Milazim Hoxha
(英訳: アギムグリ)

今回のプロジェクトはAMDA本部と現地スタッフ、その他これまで支援をして下さったすべての方々の努力の結晶だと思います。多くの人々の気持ちを胸に、このプロジェクトを成功させるために頑張っていこうと思っています。また、長い間新しい診療所を待ち望んでいたアルバナの住民たちからは、感謝の気持ちを日本の皆様へ伝え

て欲しいと何度も頼まれました。プロジェクトを実行するにあたって地域住民の協力は不可欠です。アルバナの人々はただ単に援助を受けるのではなく、自ら地域のために貢献しようという意欲が高まっています。そんな意欲にあふれたアルバナの村長ホージャ氏の手紙をここにご紹介し、コソボからの報告とします。

第16回アムダイナターナショナル国際会議
2000年12月9日・カンボジア・プノンペン市
「21世紀におけるNGOの役割」

AMDA インターナショナル事務局長 Dr. Khan M. Zaman

出席者

Dr. Shigeru Suganami, アムダイナターナショナル理事長
Dr. Sieng Rithy, アムダイナターナショナル副代表(輪番制) およびAMDAカンボジア支部長
Dr. Francisco P. Flores, アムダイナターナショナル副代表
Dr. Khan M. Zaman, アムダイナターナショナル事務局長
Dr. Sardar A. Nayeem, AMDAバングラデシュ支部長
Dr. Jorge Foianini, AMDAボリビア支部長
Dr. Denis Murahovschi, AMDAブラジル代表者
Dr. William Grut, AMDAカナダ支部長
Dr. Irawan Yusuf, AMDAインドネシア代表者
Dr. K. Dyussemin, AMDAカザフスタン支部長
Dr. Chul Won Kim, AMDA韓国支部事務局長
Dr. Oyunchimeg Magvannorov, AMDAモンゴル支部長
Dr. Dinesh Pokharel, AMDAネパール支部長
Dr. Ramesh Acharya, AMDAネパール支部事務局長
Dr. N. Rasalingam, AMDAニュージーランド支部長
Prof. Dr. F. U. Baqai, AMDAパキスタン支部長
Dr. Jose Yamanija, AMDAペルー支部代表者
Mr. Vincent Uzarama, AMDAルワンダ支部長
Dr. Sarath Samarage, AMDAスリランカ支部長
Dr. Chaokai Chang, AMDA台湾支部長
Dr. Chen Chuancheng, AMDA台湾支部
鈴木剛史, アムダイナターナショナル・コミュニティサービス局長
小西司, アムダイナターナショナル・緊急救援局長
小平雄一, アムダイナターナショナル・事務局長室プログラママネージャー
高瀬かおり, アムダイナターナショナル・事務局長室プログラママネージャー

国際会議の開催

カンボジア保健省次官そしてカンボジア主席保健大臣 H. E. Dr. Hong Sun Houtの代理である Dr. Chea Chay, 小川郷太郎駐カンボジア日本大使などを来賓に迎え、12月9日に国際会議の開会式が行われた。アムダイナターナショナル副代表およびAMDAカンボジア支部長であるDr. Sieng Rithyが歓迎の辞を述べ、その後、菅波理事長が開会の辞を述べた。

アムダイナターナショナル副代表(輪番制) およびAMDAカンボジア支部長

Dr. Sieng Rithy による歓迎の辞

カンボジア保健省次官そしてカンボジア主席保健大臣 H. E. Dr. Hong Sun Houtの代理である Dr. Chea Chay, 小川郷太郎駐カンボジア日本大使、菅波茂アムダイナターナショナル理事長、そして世界中のAMDA支部からの代表者の方々に敬意を表したい。

アムダイナターナショナルの第16回総会と「21世紀におけるNGOの役割」についての国際会議を主催することは、AMDAカンボジア支部にとって

光栄なことである。世界各地からAMDAの代表者がカンボジアに来てくださり、カンボジア王国政府高官も今日この会議に出席して下さった。出席者の皆様には意見、感想を交換していた頂き、その代わりに私たちの友情、感謝、そして歓待を受け取っていただきたい。この会議を楽しみそして“Better Quality of Life for a Better Future”にまた一歩近づけるように努力しよう。

HIV/AIDSと障害者はカンボジアの大きな問題であるため、HIV/AIDSとの闘いと障害者のためのリハビリテーションプログラムに焦点を当てた今回の会議のテーマは、来世紀におけるNGOの新しい役割を明確にするために非常に重要である。また、この機会に、いつも私たちを助けてくれ全てのプロジェクトを成功させるようサポートしてくれるカンボジア王国保健省に感謝と賛辞を述べたい。NGOと政府間の協力はプロジェクトを効率よく成功させるためには最も重要である。カンボジアでAMDAが活動を始めてからの10年間、政府がいつも私たちの活動を助けたりサポートしてくれ、とても幸運に思っている。財政的・技術的援助をしてくれる世界保健機構

(WHO)、世界銀行(WB)、アジア開発銀行(ADB)、国際協力事業団(JICA)など様々な国際機関にも感謝している。

最後に、この会議に出席してくれた出席者、講演者、来賓の皆様方に心からの感謝の気持ちを述べ、皆様にはカンボジアでの滞在を楽しんでもらいたい。

どうもありがとうございました。

菅波茂アムダイナターナショナル理事長による開会の辞

カンボジア保健省次官および主席保健大臣 H. E. Dr. Hong Sun Hout代理である Dr. Chea Chay, 小川郷太郎駐カンボジア日本大使、各界からの著名な来賓の皆様方にはこの会議の開会式にご臨席いただき大変光栄に思っている。

アムダイナターナショナルファミリーに代わり、この第16回国際会議を成功させてくれた運営委員会に心から感謝を述べたい。この会議は最初にインドで1984年に開かれ、前回は1999年にパキスタンで開催された。今年アムダイナターナショナルはカンボジアで16周年を祝えることを光栄にそして誇りに思っている。アムダイナターナショナルは1992年にカンボジアで最初のプロジェクトを実施した。私たちとDr. Sieng Rithyとの関係は1996年に遡り、1997年にDr. Rithyが岡山のAMDA本部を訪れてAMDAカンボジア支部を設立したことでますます関係を強くすることができた。それ以後Dr. Rithyと彼の優秀なチームとは友好関係が続いている。彼らをとるイニシアティブにはいつも感動させられ、時には驚かされる。今日、AMDAカンボジア支部がカンボジア保健省や世界保健機構(WHO)、国際連合など多くの機関から認められているのを知り嬉しく思う。

現在アムダイナターナショナルは、貧困撲滅とカンボジアの恵まれぬ人々や社会の主流から取り残された人々の福利のために、様々な部門においてAMDAカンボジア支部と協力しパートナーシップを組んで多数のプログラムを実施している。AMDAカンボジア支部は1993年に多くの国内避難

民家族がまだ残っている Treng Traieng でデイケアセンターを設立した。初等教育を受けることができない多くの子供たちのために AMDA カンボジア支部は識字プログラムを組み、親に対する基礎保健教育とともにこのセンターで実施した。このプログラムでこの地域の子供たちは初等教育とプライマリー・ヘルス・ケアの知識を得ることができたのである。1997年には AMDA カンボジア支部はプノンペンでクリニックを始め、特に極端に貧しい人々と地雷により障害者となった人々を対象にして、一般医療、小児科、小さな手術、ラボ・テスト、エコー、婦人科といった診療を行っている。これまでにおよそ5万6千人の人々が診療と治療のためにこのクリニックを訪れている。

1999年、アムダイインターナショナルはアジア開発銀行とカンボジア王国政府と協力し、タケオ州アン・ロカ地区の総合的保健システムを改善する目的でプログラムを始めた。同地区の保健サービスの質を向上するため保健従事者には精力的な研修プログラムが実施されている。このプロジェクトでは半数以上のプログラムが終了し、AMDA の努力の結晶が見られる。今年アムダイインターナショナルは AMDA カンボジア支部と日本の建設会社ウエストと協力し、コンボンスプー州のチャンバック小学校を再建している。AMDA カンボジア支部は近い将来 AMDA カンボジア病院を建設する予定である。AMDA カンボジア支部がさらに活動を広げ、カンボジアにおける貧困と文盲問題に取り組むことを願っている。

この会議のテーマ「21世紀における NGO の役割」が選ばれたのは、開発途上国のコミュニティ開発において NGO が重要な役割を果たしているからである。国によっては公共セクターによって提供されないコミュニティ開発の分野で NGO は重要な役割を果たしている。特に保健、教育、経済、そして環境問題が人々を貧しくさせ続けている第三世界では、NGO は重要で明らかに意義のある役割を果たしている。残念ながら、途上国の半分以上の人口が疾病や文盲、貧困、抑圧といった不幸と戦っている。こういった不幸に苦しむコミュニティでは、毎日が生きるための戦いである。このようなコミュニティは自分たちの運命を変える可能性を秘めているのだが、リーダーシップと方向付けに欠けているのである。ここがまさに NGO が前向きで意義のあるサポートを提供し、途上国でダイナミックで革命的な変化をもたらすのに中心的役割を果たすことができる場所である。

世界中で政府、2国間、多国間の機関が NGO や NPO を人間社会の福利を改善するためのパートナーとして認めてきている。こうした機関は市民社会の努力と専門的技術が人道的奉仕活動やプロジェクトの利益をコミュニティに近づけ、人々の参加を促進していることを認めながらも、マネージメント能力を伸ばす必要のある NGO や NPO の存在を憂慮している。彼らは運営全般にわたって高い専門性と透明性を、そして財政や物資のリソースの利用に際しては高い責任性を求めている。プロジェクトにおいてマネージメント能力を高めることに対して、さらに開発への総合的・統合的アプローチに対する要求が増えているにもかかわらず、NGO/NPO 側の対応は遅れている。保健、教育、環境、所得創出、女性と開発、農村開発、社会開発の分野で数千のプログラムがあるが、明らかに資金が限られている。私たちの経験からいうと、新旧の医療・技術・財政リソースを十分に活用する持続的行動と首尾一貫した国際協力を通じてのみ、疾病と貧困という悪循環を断ち切るために保健デリバリーシステムを強化し伝統的なアプローチを超えることができるのである。

しかしながら、NGO が現在の広範囲にわたる人道問題を解決することはできないことや全ての人間の苦痛を防ぐことができないことは避けられない事実である。NGO にできることは、援助の効果と質を高め、そうして世界中の恵まれない人々の生活に大きな変化をもたらすことである。NGO はまた、国際間の理解のために鍵となる役割も果たすことができる。例えば、神戸で阪神大震災があった1995年に大地震がサハリンで起こったとき、ロシア政府は政治的理由で日本政府の救援チームを断ったが AMDA の医療チームを受け入れた。阪神大震災の際のロシアの救援活動に敬意を表して、AMDA は相互扶助の精神で医療救援を行ったのである。これはまさに NGO を通じた国際理解の良い例である。時間が限られているため詳細についてはお話できないが、この重要なテーマについて会議のいろいろなセッションで博識な学者、研究者、講演者から学ぶことは多いと思う。

この機会を利用し、私たちの組織を紹介したいと思う。アムダイインターナショナルは人道主義、非営利、非政党、非宗派、非政府の組織である。そのビジョン（未来像）は、世界平和と発展である。AMDA の使命は、アジアや他の大陸の社会的・経済的に恵まれない社会から取り残されている人々の医療と生活状態を改善することである。これ

は AMDA のスローガンである「より良い未来のためのより良い生活」に織り込まれている。AMDA は自らを人道援助活動におけるパートナーシップを通じて尊敬と信頼を築く活動的なネットワークであると考えている。設立以来ずっと、AMDA は自らの目的を追求し、達成するため熱心に努力を続けている。我々は社会的・経済的に恵まれない社会から取り残されている人々の生活を改善するためには3つの大きな障害があると考えている。それは戦争、自然災害及び貧困である。AMDA のプロジェクトはこれらの障害を克服するために努力している。その貢献と功績を認められ、1995年に AMDA は国連経済社会理事会 (UNECOSOC) から協議的地位 (CS) を授与された。

AMDA はアジア、アフリカ、ヨーロッパ及び南北アメリカに27支部と14のプロジェクト・オフィスを抱え、世界の NGO の中で大きな規模をほこる。緊急救援活動や開発プロジェクトを世界約50ヶ国で実施してきており、現在は15ヶ国で約400人のスタッフが活動している。何万もの人が直接的、間接的に AMDA のプロジェクトから利益を受けている。これらのプロジェクトは相互扶助の精神に基づき、現地主導型、コミュニティの参加及び能力向上に重点を置いたパートナーシップを基本としている。AMDA はこれらの要素がいかなるプロジェクトにおいても成功の鍵になると信じている。AMDA の国際人道援助活動は3つの基本的理念に基づいて実施されている。(1) 他文化の尊重、(2) 地域住民が生まれ持っている能力の尊重、(3) 他者からの AMDA に対する信頼の尊重である。AMDA のメッセージである「現地主導型相互扶助精神に基づくプロジェクトを通じた平和のための世界的なパートナーシップのネットワーク」が階級、信条、民族や宗教にかかわらず世界中の至るところに届くまで、AMDA は活動を広げ促進する努力をする。

会議のテーマに関連した議論の他にも、出席者の方々には新しい関係を築きさらに交友を深め、お互いの経験から学んでいただく機会がたくさんある。この機会に、AMDA のもうひとつの良きパートナーである日本政府と外務省に心よりお礼申し上げます。最後に、友人たちとのパートナーシップの絆がさらに強められ嬉しく思う。この会議では、世界中からの出席者と新しく友人となることを楽しみにしている。この会議を成功させてくれた Dr. Rithy と運営委員会のメンバー全員に今一度感謝したい。ご静聴ありがとうございました。

その他のスピーチ

駐カンボジア日本大使小川郷太郎氏による挨拶に続いて、カンボジア保健省次官そしてカンボジア主席保健大臣 H. E. Dr. Hong Sun Hout の代理である Dr. Chea Chay が会議の閉会を宣言した。

本会議では HIV/AIDS との闘いと NGO の役割と地雷被害者のためのリハビリテーションプログラムにおける NGO の役割に焦点を当て、カンボジア政府や国際機関、現地および国際 NGO からの代表者がプレゼンテーションを行った。プレゼンテーションのあとには質疑応答セッションと議論が続いた。

国際会議の閉会式

カンボジア社会問題・労働・職業訓練・青少年リハビリテーション大臣 Mr. Ith Sam Heng により 12 月 9 日夕方にこの会議は閉会された。運営委員会委員長 Dr. Sao Sovan Retnak が挨拶をし、AMDA カンボジア支部副支部長 Dr. Tieng Sivanna が感謝の意を述べた。その後、菅波理事長は下記の閉会の辞を述べた。

閉会の辞

カンボジア社会問題・労働・職業訓練・青少年リハビリテーション大臣 Mr. Ith Sam Heng、来賓の皆様、出席者の方々にこの記念すべき式典に参加いただき感謝する。特に Dr. Sieng Rithy と運営委員会の方々にはこの会議を成功させるため誠実な努力をしていただきとても感謝している。学術的講話によりこの会議のテーマ「21 世紀における NGO の役割」を充実したものにしてくださった卓越した講演者の方々に御礼申し上げます。

素晴らしい講話から、NGO が途上国のコミュニティー開発と貧困撲滅に重大な役割を果たすことができることがわかった。貧困は紛争や自然災害よりも致命的な影響を世界の人口に及ぼす程の多大な影響力があることが証明されている。私たちの考えでは、貧困は多次元であり、ヘルスケア・サービスと基礎教育へのアクセスの欠如、性格差、不安定要因、紛争、力のなさや社会的差別に現れている。経済的視点からすると、現在の世界は北と南の二つのグループに分かれている。先進工業国と発展途上国である。初めのグループは世界人口の 20% を占めているが、世界の富の 80% を獲得している。一方、もう一つのグループは総人口の 80% を占めているが、世界の総収入の 20% しか得ていないのである。北に属する国々からの多大な規模の援助にもかかわらず、これら二つのグルー

プ間の格差は広がる一方である。悪化する状況の中、南北格差を縮めるのにますます大きな役割を果たすようになっているのが市民を中心とした人道援助団体、いわゆる NGO である。日本の NGO は欧米の NGO に比べ歴史は浅いが、発展途上国のコミュニティー開発と貧困撲滅において非常に重要な役割を果たしている。1980 年代に日本の NGO/NPO はたった数十団体であったが、今世紀末の時点で日本に拠点を置く NGO の数は 500 に到達し、NPO は数千存在するという。しかしながら、組織としての成長という点では、これら日本の NGO は能力面でも財務面でもまだ幼少期にある。これは、欧米以外の国々では日本を含め、まだ博愛活動という観念が行き渡っていないことと、人道活動をサポートする十分な法律システムが途上国では整っていないことに起因する。例えば、日本では NGO/NPO 法案が 1998 年に国会を通ったが、欧米諸国ではこうした法律は半世紀程前から施行されているのである。日本では個人や企業の行う寄付には税金控除がされず、これが日本社会での博愛的運動を大きく阻んでいるのである。

AMDA は設立より世界から貧困を撲滅するために活動してきており、貧困にかかわる多様な側面に取り組むために AMDA が従ってきた枠組みは開発プロジェクトの実行という経験を通して徐々に進化してきている。貧困の性質と決定要素を明確に理解しなければ貧困の根本原因に取り組むことはできないと AMDA は悟るようになった。貧困の根本原因をつきとめる一つの方法はコミュニティーのメンバーに意見を口に、社会のメンバーに多大な負担を掛けている貧困を分析する機会を与えることである。しかし、意図されたい受益者が自分たちの考えをコミュニティー外に正確に伝えるという基礎的な技術を持っていないがために、外部の考えを取り入れた結果良くない干渉を行ってしまうということがありえる。AMDA が達成しようとしているのは、様々な能力向上プログラムを提供することにより現存する現地組織の能力を向上させることによってこのような声を持たない人々のネットワークを作ることである。我々は経験上、最も貧しい地域の人々でさえ協力活動に携わりたいと願っているということを知っている。その人々にももちろんプライドと尊厳があり、その時間やアイデアを用い、またはプロジェクトへの参加などによって活動に寄与している。そのような現地住民のイニシアティブと参加によって、AMDA はその日限りの一匹の魚を与えるに等しい一度きりの援助ではなく、漁の方法を教えるように、地域社会が存続して

ゆける方法をとるのである。

AMDA インターナショナルは人道援助活動のロジスティックなネットワークを通して世界中の国々を繋げたい。こうした背景により、私たちは新しい支部を開き国内外の機関と関係を結ぼうと努力している。私たちの目的は平和の構築、繁栄、疾病の除去、世界の恵まれない人々の生活の向上を助けることである。平和の定義はそれぞれの文化背景によって異なるため、平和という言葉に一つの定義を持たせることはできない。しかし、十分な食べ物、健康、そして基礎教育を得るという人間の基本的ニーズを満たすことによって平和が達成できるということには殆どの人が賛成するであろう。言い換えれば、人々が十分な食べ物を得て、健康であり、教育を受けられてこそ、人々は生産的活動に従事し平和に向けて共に努力することが可能となるのである。

21 世紀の幕明けが間近になっているが、AMDA は難問に取り組む中でリーダーシップと責任を行使し、新しいチャレンジには立ち向かっていくつもりである。これまで AMDA インターナショナルは保健と社会部門で数々の功績を残してきた。AMDA インターナショナルはアジア、アフリカ、ヨーロッパ、ラテンアメリカで国内外、二国間、多国間の機関や政府と協力してプロジェクトを行っている。AMDA は日本の外務省、国際協力事業団、郵政省、地方政府、財団とのパートナーシップを強めてきた。また AMDA は国連、そして国連機構内の様々な機関、国連開発計画 (UNDP)、国連高等難民弁務官 (UNHCR)、国際移民機関 (IOM)、世界保健機構 (WHO) と協力している。保健と社会の分野で最大限のリソースを活用できるように、私たちは世界銀行やアジア開発銀行、米州開発銀行といった多国間の開発銀行とも関係を築いた。これらの機関、組織、政府には私たちの相互扶助精神を実行するために援助をしていただき、本当に感謝している。AMDA ファミリーは人間には三つの関係があると信じている。それはフレンドシップ、スポンサーシップ、パートナーシップである。この三つの関係は「ありがとう」という言葉を使って区別できる。フレンドシップでは「ありがとう」という言葉はいらぬ。スポンサーシップでは受益者は「ありがとう」といわねばならない。パートナーシップではお互いが「ありがとう」と言い合うのである。AMDA は他人を助ける際には実は自分も助けられているという信条を持っているため、私たちはパートナーシップを推進している。これこそが相互扶助の本質である。AMDA は「平和のためのパートナーシップのネットワークを世界にひろげるために、相互扶助の

精神に貫かれたプロジェクトを現地のイニシアティブによってすすめること”をモットーとして相互扶助精神に基き援助の手を差し伸べるのである。

AMDAは、必要とされているところがあれば、一人も見逃すことなく支援を行う人道援助活動に日夜努力している。天災であれ人災であれ、ひとたび緊急事態が発生するやAMDAは被災者救援のために常に第一線で活躍している。しかし、私たちの行っている国際的な人道援助協力への貢献は、ひとりAMDAの成功にのみ帰せられるものではない。名の知られていない団体や個人による、AMDAへの寛大な支援と信頼がある。それゆえAMDAはこの支援や援助を一番必要としている人々、社会から取り残されている人々、そして災害に遭いひしがれている人々に最大限の便宜がはかられる努力をしている。このように私達の「相互扶助」の理念実現のために頂いている、これら協力団体や、ボランティアの方々からの支援に対し、私たちの心からの感謝を申し上げます。相互扶助という基本的な理念が私たちの世界中のプロジェクトと活動を導き、AMDAをユニークなNGOにしている。

この会議の目的は、アムダイインターナショナルと人道的、社会福祉、災害救援、リハビリテーション、開発など世界平和と保健衛生の促進、世界の恵まれない人々の生活向上に関する活動を行う他の世界的な機関との関係を強めることでもある。最後に、講演者、出席者、来賓の方々、組織委員会、その他の出席者に再び感謝の意を申し上げます。来年の台湾での国際会議でまたお会いし、互いに新しい経験や業績を交換できることを願っている。ご静聴ありがとうございました。

ブノンベン・ミレニウム宣言

1. 私たち出席者とアムダイインターナショナル支部支部長は、新しいミレニウムを飾る年にここブノンベンにて、アムダイインターナショナルの第16回国際会議および総会に出席した。「21世紀におけるNGOの役割」についての国際会議を組織してくれたAMDAカンボジア心より感謝する。同時に、この会議のテーマについて学術的講話をしてくださったスピーカーの方々にも感謝申し上げます。
2. 20世紀最後の25年間で非政府組織(NGO)と非営利組織(NPO)は、特に保健、教育、経済、そして環境問題がさらに人々を貧しくしている開発途上国のコミュニティ開発と貧困の減少にますます重要な役割を果たしてきたことを確認した。

3. 我々は、国によっては公共セクターによって提供されないこともあるコミュニティ開発の分野においてNGO/NPOが大切な役割を果たせることに同意した。途上国の半分以上の人口が疾病や文盲、貧困、抑圧といった不幸と戦っている。こういった不幸に苦しむコミュニティでは、毎日が生きるための戦いである。このようなコミュニティは自分たちの運命を変える可能性を秘めているのだが、リーダーシップと方向付けに欠けているのである。ここがまさにNGOが前向きで意義のあるサポートを提供し、途上国でダイナミックで革命的な変化をもたらすのに中心的役割を果たすことができる場所である。

4. 我々は、世界中で政府、2国間、多国間の機関がNGOやNPOを人間社会の福利を改善するためのパートナーとして認めてきているという事実を確認した。こうした機関は市民社会の努力と専門的技術が人道的奉仕活動やプロジェクトの利益をコミュニティに近いものとし、人々の参加を促進していることを認めながらも、マネージメント能力を伸ばす必要のあるNGOやNPOの存在を憂慮している。我々は、NGO/NPOが運営全般にわたって高い専門性と透明性を、そして財政や物資のリソースの利用に際しては高い責任を持つようになるべきだということに合意した。

5. 我々は、保健、教育、環境、所得創出、女性と開発、農村開発、社会開発の分野で数千のプログラムがあるが、明らかに資金が限られており、こうしたプログラムを実施する側も不十分であるということを確認した。

6. 我々は、NGO/NPOと政府や国連機構、多国間開発銀行、企業や会社といったドナー間のパートナーシップを更に強化する必要があることを認識した。このパートナーシップにより新世紀にはより多くの援助の機会が皆の手に届くようになるであろう。

7. 我々は、素晴らしい講話により、貧困は紛争や自然災害よりも致命的な影響を世界の人口に及ぼし続け、貧困は多大な影響を及ぼすことが証明されていることを学んだ。私たちの考えでは、貧困は多次元であり、ヘルスケア・サービスと基礎教育へのアクセスの欠如、性格差、不安定要因、紛争、力のなさや社会

的差別に現れている。

8. 我々は、現在の世界は先進工業国である北と発展途上国である南の二つのグループに分かれていることについて議論した。初めのグループは世界人口の20%を占めているが、世界の富の80%を獲得している。一方、もう一つのグループは総人口の80%を占めているが、世界の総収入の20%しか得ていないのである。北に属する国々からの多大な規模の援助にもかかわらず、これら二つのグループ間の格差は広がる一方である。悪化する状況の中、南北格差を縮めるのにますます大きな役割を果たすようになっていくのがNGO/NPOである。

9. 我々は、貧困の性質と決定要素を明確に理解しなければ貧困の根本原因に取り組みることができないことを悟った。貧困の根本原因をつきとめる一つの方法はコミュニティのメンバーに意見を口にし、社会のメンバーに多大な負担を掛けている貧困を分析する機会を与えることである。

10. しかしながら、NGOが現在の広範囲にわたる人道問題を解決することはできないことや全ての人間の苦痛を防ぐことができないことは避けられない事実である。NGOにできることは、援助の効果と質を高め、そうして世界中の恵まれない人々の生活に大きな変化をもたらすことである。

11. 我々は、経験から、新旧の医療・技術・財政リソースを十分に活用する持続的行動と首尾一貫した国際協力を通じてのみ、疾病と貧困という悪循環を断ち切るために保健デリバリーシステムを強化し伝統的なアプローチを超えることができることを学んだ。

12. 21世紀の夜明けが間近になっているが、AMDAは難問に取り組む中でリーダーシップと責任を行使し、新しいチャレンジには立ち向かっていくつもりである。

最後に、ブノンベンでの議論から貢献がなされ、さらなる安定、平和、そして繁栄のある21世紀という希望を胸に、共に前進する努力を続けることを願う。

2000年12月10日にカンボジア・ブノンベンにて承認。

■ AMDA 兵庫支部

AMDA 兵庫支部 3周年記念講演会

私たちAMDA兵庫支部は活動を始めて3周年を迎えることができました。これもひとえに皆様のご支援の賜物と深く感謝しております。

今回これを機にAMDAネパール子ども病院の現況をお伝えし、私どもの活動の一端を報告させていただきたく下記のごとく記念講演会を開催致します。

記

日 時 : 平成13年2月17日(土曜日) 15時~17時
 場 所 : 神戸国際会議場 401・402会議室
 三宮駅(JR・阪神・阪急)から車またはポートライナー(市民広場下車)で約10分。
 テー マ : 「AMDAネパール子ども病院の現況」
 小倉健一郎: 整形外科医、AMDA兵庫支部ネパール支援室長
 : 対談「21世紀の共生とNGOの新たな展開」
 藤原 健: 毎日新聞大阪本社 社会部部长
 菅波 茂: アムダイインターナショナル理事長
 参加費 : 無料 後 援 : 毎日新聞社
 お問い合わせ先: AMDA兵庫支部 事務局 0798-71-9821

■ AMDA 神奈川支部

12月度 医療通訳養成講座の報告

柘植 靖子

12月3日(日)、12月度の医療通訳養成講座が、大和市の小林国際クリニックで行われた。

講師は、小林米幸院長。参加者は5名。テーマは、「外国人医療総論およびフリーディスカッション」ということで、実際の外国人医療のケースをもとに行われた。医療関係者なら誰もが、知っておくと役に立つ、興味深い内容だった。

1. 外国人から医療相談を受けたら

どのような病院に連れて行ったらよいか。

- 言葉のできる医師、看護婦のいる病院。
- AMDA国際医療情報センター・国際交流協会等で情報を得る。

医療関係者が通訳を使う場合

- ・ ゆっくり、短く切って話す。
- ・ 日常会話に問題がなくても、医療用語は理解できない場合があるので、難しい言葉は使わない。
- ・ 相手(患者)の意志を確かめる。

通訳をする場合

- ・ まず自分の立場を言い、通訳としての能力はどれくらいかを話しておく。
- ・ 分からない言葉は確かめる。
- ・ 自分の感情を入れない。

2. 保険について

保険のない外国人が多い

～なぜ保険に入らないのか～

- ・ 在留資格があり、加入資格があるのに情報がなく、それを知らない。
- ・ 国民健康保険の保険料が高いので、母国のプライベート保険に入る。
- ・ オーパーステイで加入資格がない。

国民健康保険

国籍を問わず、日本に在留している人は、全員加入が義務。(社会保険加入者は除く)

留学など、1年以上のビザがあれば加入できる。

保険料は、収入、各市町村によって異なる。

3ヶ月前からさかのぼって加入することができる。
 社会保険

在留資格は関係なく、会社が半額を負担すれば入れる。

プライベート

保険料がおりないものが多い。

出産育児一時金。歯科診療一般。高額療養費支給(63,600円/月)など

3. 外国人も利用できる制度

結核予防法…感染症に関するものは、在留資格に関係なく、入院費が無料になる。

小児予防接種…外国人登録証があれば、在留資格がなくても無料で受けられる。

地方自治体が行っており、その時期になると通知が来る。

労災…在留資格に関係なく、労働基準監督所に申し出れば、保険料が降る。

生活保護…定住・永住ビザを持つ人のみ。

行旅病人法…在留資格に関係なく、住居なし、無職の人のみ。

出産に関する助成制度…児童福祉法第22条に基づく等

4. 外国人診療で気を遣うこと

保険がなく、医療費が支払えない場合

→薬を安価なものに変える、検査方法を考えるなど、相談しあう。

入院の際の食事

→食事の摂取量が減少しても、体調の悪化ではなく食事が合わない場合もある。

家族、知人に差し入れを頼む。

特に宗教上のものは、どうしても譲れない。

欧米との医療の相違点

→欧米人は特に、自分たちの医療を要求する。

入院環境、治療に関して、選択肢がないことを嫌がり、日本の医療には人権がないと言われる。

投薬に関して

→日本人は医師に任せる傾向があるが、外国人は自分で判断したがる。

自分の判断で、多めにのんだり、途中で止めたりする人がいる。

AMDA 派遣者帰国報告会

AMDAでは岡山国際交流センターにおいて派遣者の帰国報告会を続けて行いました。

1月11日には、昨年4月からジブチで活動し12月に帰国した産婦人科医の伊藤まり子医師が、ダル・エル・ハナン産婦人科病院の現在の状況について報告しました。

また1月13日には、第一回APIC・AMDA共催の国際ネットワークセミナーを開催しました。JICA中国国際センターの伊禮英全課長のご挨拶の後、APIC（財団法人国際協力推進協会）専務理事の小沢大二氏から「国際医療協力・災害医療救援活動をととしての国際貢献」と題して講演がありました。続いて昨年11月にカンボジアで医療活動を行った整形外科医の濱田一壽医師の報告があり、最後にコソボから一時帰国中の濱田祐子調整員が現地でのAMDAの活動、およびコソボの現在の様子などについて報告を行いました。（詳しくは次号で報告いたします。）

会場は椅子が足りなくなって運び入れるほど多くの参加者で埋まり、このような報告会にしては珍しく特に若い人が目立つとの感想を小沢専務理事も述べておられました。

AMDAは今後も派遣者の帰国時などに随時報告会を開催する予定です。この頁の「人・海外往来」でお馴染みの派遣者の皆さんが報告いたします。日程・場所などは決まり次第ホームページやジャーナルでお知らせしますので、そちらをご覧くださいの上、お近くの方はぜひご参加ください。

人・海外往来

2000年12月16日～2001年1月15日

アジア	ネパール	辻井美由記（インターン） 高野 篤（医師） 鈴木 俊介（調整員） 若山由紀子（医師） 上住 純子（看護婦） 小田 容子（看護婦） 小倉健一郎（医師） 小林 哲也（新駐在代表） 川口まり子（看護婦） ナンセンエ（ミャンマーオフィス）
	ミャンマー	藤野 康之（調整員） 川村 栄次（駐在代表） 錦織 信幸（医師）
	カンボジア ベトナム バングラデシュ	
ヨーロッパ	コソボ	濱田 祐子（駐在代表代行）
アフリカ	ケニア	林 信秀（駐在代表） 横森 佳世（新駐在代表） 横森 健治（調整員） 岸田 典子（コミュニティサービス局）
	アンゴラ	谷合 正明（駐在代表） 田中 一弘（総務会計）
	ジブチ	伊藤まり子（医師） 岸田 典子（コミュニティサービス局）
	ルワンダ ザンビア	岸田 典子（コミュニティサービス局） 近藤 麻里（看護婦） 岸田 典子（コミュニティサービス局）
	JICA ザンビア	佐々木 論（調整員） 妹尾 美樹（保健教育） 広田 眞美（公衆衛生） 岡安 利治（調整員）
中南米	ホンジュラス	前田あゆみ（駐在代表）

特定寄付者

アフリカ	1名
田中 宣子	
カンボジア	3名
中島 久喜	
マックスバリュ	
メガマート一宮	
カンボジア小学校	1名
AMDA 高校生会募金活動	
カンボジア水害	2名
小西喜久子	蓮井 道子
ネパール子ども病院	11名
大永 徳彦	岡本 明子
勝原 則子	斎藤 ちよ子
島田 義一	下市 仁志
Shoji Masaji	匿名
出来 園子	平松 浩一
宮川 峰子	
ホンジュラス	1名
AMDA 鎌倉クラブ	
ホンジュラスセメント	3名
大古小学校PTA 国際交流しよう会	
谷口史圭子	浜田 敏江
ミャンマー	1名
中島 久喜	
ミャンマー井戸	1名
中島 妙江	

ミャンマー給食	1名
ジャスコ岡山店	
ミャンマー子ども病院	1名
Shoji Masaji	
ミャンマー支援委	1名
サンマルク	
緊急救援	7名
蛇川千恵子	
芥田 俊夫・綱子	
川瀬 成彦	
浜松テスター	村田 漁村
村田スエ子	山下 健一
三原山	1名
岡山商科大学校友会本部	2名
子ども病院	久喜
瀬尾 浩一	中島 久喜
自立支援	1名
金川加江子	
篠原基金	4名
若政 豊子	中島 久喜
永田 洋子	福田はるみ
地域医療	1名
中島 好美	

12月物資寄付

いずみの会	2名
日本アイビーエム	



ボランティア

一般ボランティア

井口 恵子	大野 仁
小野田真弓	清輔 幸子
清原 章子	黒瀬美砂子
小見山奈美子	武永 律子
竹久 佳恵	田中 啓子
谷川 松美	坪田 薫
中尾 優子	中川 知子
中村 敬子	藤井俊文字
本郷 順子	前嶋 淳
宮前 貴子	前田 淑子
村上八重子	

高校生ボランティア

岩岡 寛人	奥瑩 恭子
川上 侑希	清水 誠子
千先 翔子	渋谷 未来
高尾 明子	伊達 潤
難波 亮	廣瀬 寛子
三宅ちか子	

翻訳ボランティア

藤井俊文字	森川 恵子
出口 純子	田辺 敦子
小川のぞみ	

ホームページ作成ボランティア

赤木 良雄	浦田 尊広
小田 三典	香川晋一郎
鹿嶋小緒里	種田 創
メロンス（井上智香子）	梅本
明美 木村真知子	藤井逸子
藤田貴美	

求人ジャーナル

求人タイムス	
東京女子大学同窓会	
老人保健施設すこやか苑入苑者	
老人保健施設すこやか苑	
デイケア通所者	
MEDIA MIX	

AMDA Journal に関するお問い合わせは、AMDA 会員情報局 TEL 086-284-8104 まで

*ご入会、会費、ご寄付、その他ご購入のための振込は、本誌綴じ込みの郵便振替用紙をご使用下さい。連絡欄に振込目的を明記して下さい。

*クレジットカード（全日信販のAMDAカード）での会費納入方法もあります。

AMDA カードについてのお問い合わせは、

全日信販株式会社 本社営業部 086-227-7161 です。

AMDA ホームページ
http://www.amda.or.jp

エルサルバドル共和国大地震への 緊急医療救援開始

(2001年1月18日)

地震により大きな被害を受けたエルサルバドルに向け、関西国際空港からアムダイナーナショナルの緊急医療救援チームが出発しました。現地ですでに活動開始しているホンジュラスオフィスからの先遣調査員に加え、AMDAカナダ支部の医師が合流し、ボリビア、ペルーのAMDA各支部からの医師、看護師も参加、AMMM=AMDA Multi-national Medical Mission (=アムダ多国籍医師団) を編成し、保健医療活動を開始しました。

<派遣メンバー>

1. 日本から

比屋根 勉 (ひやね つとむ)	医師	沖縄県在住
侯崎 希代子 (またざき きよこ)	看護師	熊本県在住
加川 洋 (かがわ ひろし)	調整員	東京都在住

2. ホンジュラスから

前田 あゆみ (まえだ あゆみ) AMDAホンジュラス駐在代表 他1名

3. AMDAカナダ支部から

Dr. Kevin Chan	医師
Ms. Kyra Abbott	看護師

4. AMDAペルー支部から

Dr. Jose Yamanija	医師 (AMMMチーム代表)
Dr. Milagros Zegarra	医師

5. AMDAボリビア支部から

Dr. Walter Montano	医師
Ms. Marlene Lehm	看護師

<日本からの派遣日程>

1月17日 (水)	17:10	関西空港発 (JAL 60便)
	10:05	ロスアンゼルス着
	23:00	ロスアンゼルス発 (TA 529便)
18日 (木)	6:20	サンサルバドル着

<協力団体 (ご支援をいただいた順) >

日本航空、J.S.Foundation、(株)ウエスト

募金のお願い

AMDAでは被災者への緊急医療支援を行うため、皆様のご支援をお願いしています。

郵便振替 口座番号01250-2-40709 口座名AMDA

* 通信欄に『エルサルバドル』とお書き入れ下さい。

問い合わせ先 アムダイナーナショナル 緊急救援担当
小西・佐伯 TEL086-284-7730 FAX086-284-8959





コンゴ自治州プリズレン総合病院小児科へ栄養補助食品を配給

あなたたちのちからを
必要とする人たちがいます



AMDA募金箱を置いていただける方はご連絡下さい (TEL 086-284-7730)